

縄文人と動物たち

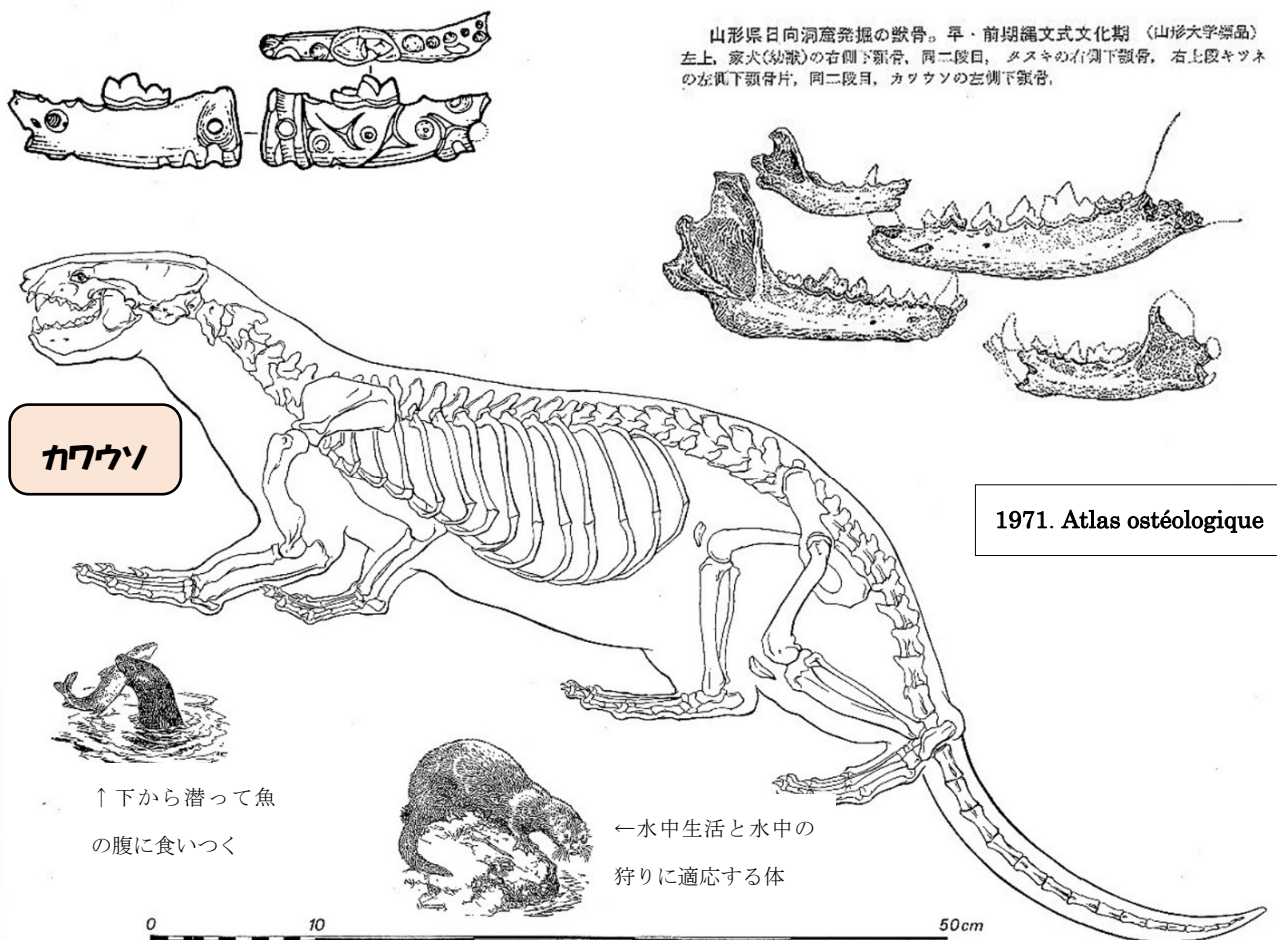
東京国立博物館客員研究員

金子浩昌

縄文人と動物との関わりを文様の彫刻されたカワウソの下顎骨でみます。縄文晩期の三叉文様をつけたカワウソの下顎骨があります。

カワウソは日本列島から姿を消してしまいました。かつては縄文貝塚のどこでもその遺骸を出土しました。ただ、タヌキやキツネなどに比べると数は少なく獲るのは難しかったようです。水辺や水中で活動する獣でした。

縄文貝塚からの出土品にここに図示した下顎骨の骨体部に土器につける文様そのままが刻まれている例がありました。縄文晩期の文様で、北海道・栄磯洞穴の出土です。日本海に面し、人々の生活の拠点となった遺跡の一つですが、カワウソも棲みやすい場所であったのでしょう。縄文人が大切にしていた土器の文様がそのままカワウソの骨にも刻まれていると云うことは、カワウソを大切にする気持があったからです。カワウソの力強い生活力に惹かれていたのでしょう。 北海道 島牧村 1973



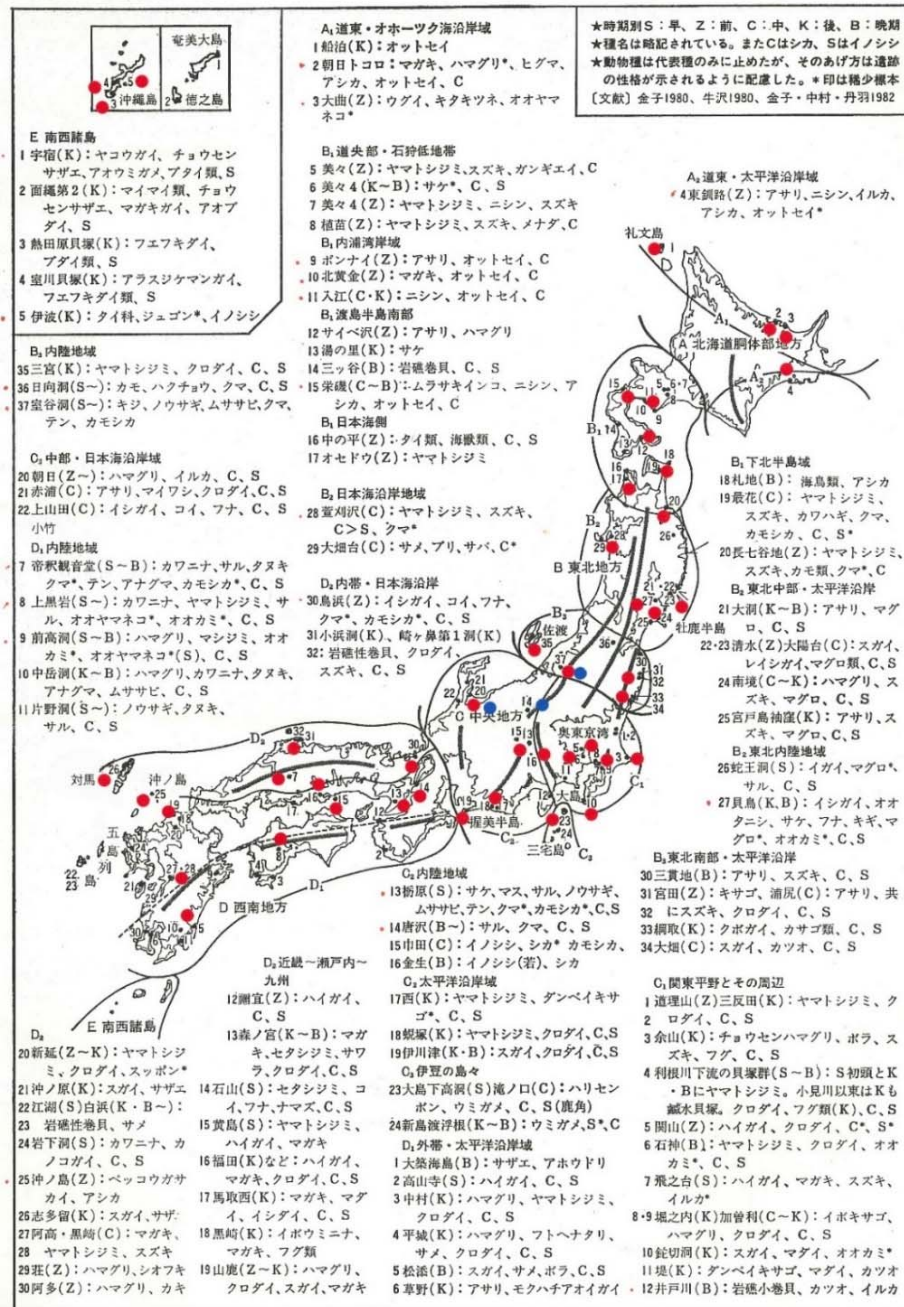
玉抱き三叉文と言って、縄文晩期大洞 B 式期、晩期初頭。ていねいに文様を彫刻している。骨だからと言

って省略していない。大切に扱っている証であり、唯一の例である。右上の下顎骨にも切断加工品がある。

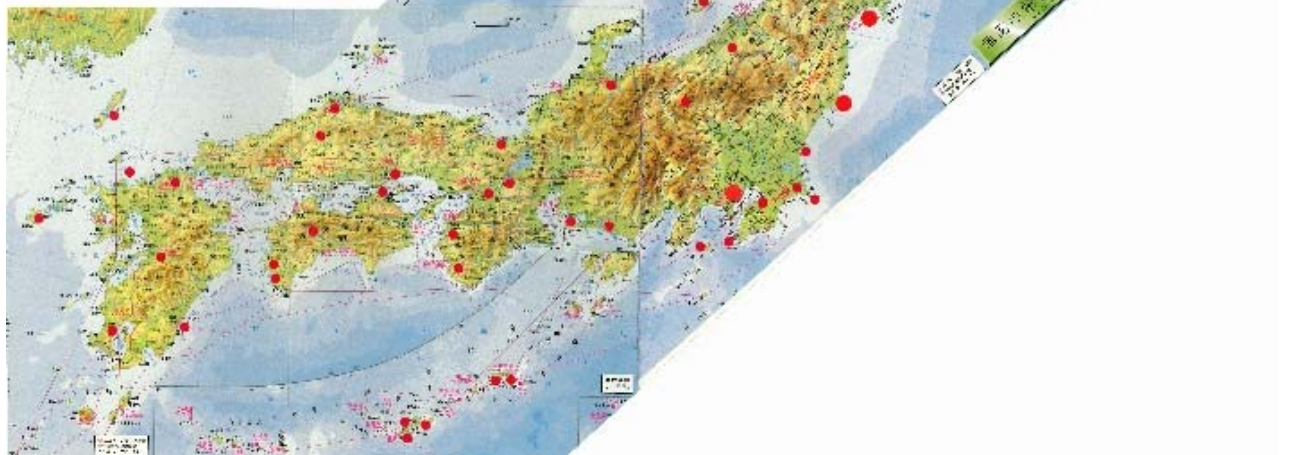
縄文時代
貝塚遺跡の分布図

それぞれの●印カ所が考古学的にどのようなことで著名なのかを簡単に述べました。原著論文にはさらに詳しい説明があります。

金子浩昌、西本豊弘、永浜真理子
狩猟・漁労対象動物の地域性
季刊 考古学 創刊号、1982



縄文時代の漁撈・狩猟活動の地域性を示す地図



遺跡に立った思いで、また遺物を手に持った感じで読んでいただきたいのです。

縄文人と動物たち

私がここで述べたいと思うことは、縄文人が動物たちを弓矢や槍で追い廻したり、落とし穴に誘い込む算段をどのように考えたかということではなく、縄文人たちと動物との関わり、動物たちをどのようにみていたか、そこから何かわかることがないかしら、という思いで、遺物(動物骨、骨角器などの)を報告書から選ん

で図示してみました。

縄文人は動物たちに教えられ、助けられたそのお陰で厳しい自然の中を生き抜くことができました。畏敬の念で見えていたはずです。縄文文化、骨角器文化の根底です。縄文文化を学ぶと云うことはどういうことだったのでしょうか。

考古学的な資料からの考察

日本列島の各地に残された縄文時代の貝塚からは、当時の人々によって捕獲された動物—獣・鳥・魚類などの遺体が残っています。

さらにそれらの動物の骨格を素材として、つくられた道具をみることができます。

動物たちが縄文人の衣・食の支えになったことはもちろんですが、その骨角を素材として様々な道具がつくられ、動物を獲り、身を飾る装飾品の素材になりました。骨角器文化と呼ばれるものですが、これは世界の石器時代文化の中でも比類の無い優れたものです。その片鱗を御覧下さい。

まず、関東地方の後～晩期に形成された大規模貝塚でその獣類捕獲は、どのようだったのでしょうか。

イノシシ・シカは話題の中心になりますが、どの位個体数が残されていたのでしょうか。

市原市西広貝塚例はその個体数を推定した唯一の例です。時期差については、本文中に述べられています。

本州～四国～九州 - 縄文人と関係のあった獣たち

☆ニホンジカ・イノシシ

☆ツキノワグマ・ニホンカモシカ：山地

☆イルカ類・アシカ・オットセイ・アザラシ類・トド・ジュゴン(日本産クロアシカ、明治以降姿を消す)

☆タヌキ・キツネ・イタチ・テン・アナグマ・ニホンカワウソ・ラッコ・ムササビ

☆ホンドオオカミ・オオヤマネコ(狩猟獣ではなかったと考えています。)

ニホンジカとイノシシ - 最も普通にみる獣。縄文人の生活を支える。

○衣・食

○道具の素材として最重要の役割「骨角器」

獲り つくる 生産道具

身を整え 飾る 装身具

○骨角器の製作は各地に独自の文化をつくり出した。

素材の違い、製作法の工夫に専念したから。

日本海側の遺跡-富山県富山市オダケ(小竹)遺跡(呉羽町・県東部)

2009年北陸新幹線(長野～金沢間)建設工事中に発見されました。しかし、以前よりよく知られた遺跡でした。日本海側最大級の貝塚ですごい遺跡。何がすごいのか、これからの研究で更にわかってくるでしょう。

日本海側には貝塚が少ない。単調な海岸線だから。河口部(神通川、庄川の河口)に小入江ができるが、砂州が出来て、内側は泻湖(ラグーン)になる。ヤマトシジミが多産。

丘陵の縁に住居をつくり、シジミを採って食料とし

富山県富山市 小竹貝塚 骨製装身具 → 諸磯 A・B(浮島期)

潟湖と内陸の豊かな自然に支えられた生活がこの骨角器文化をつくり出した。遺物を実査する機会がなかったが、分類を試みた、報告書で充分であった。
金子浩昌:小竹貝塚出土の骨角装身具の分類-小田原市羽根尾貝塚出土の骨角製品研究の比較資料としての試み-神奈川を掘るⅡ、玉川文化財研究所 研究論集 2017

貝塚ができた。

漁労の活動

狩猟の活動 シカ44% イノシシ18%

イヌ30%

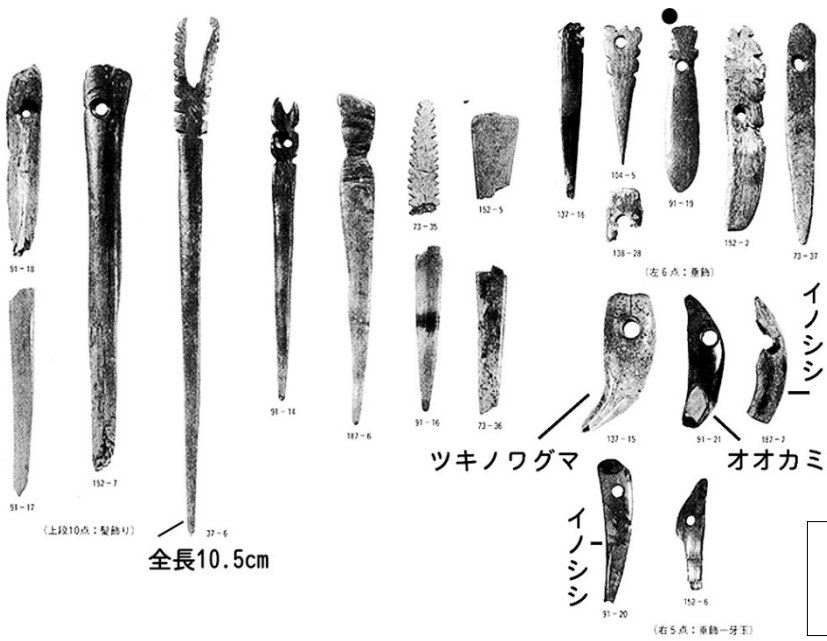
・射水(いずみ)平野背後の丘陵は、狩猟に好条件であった。

・呉羽丘陵

動物遺体の出土、クマ・オオカミ犬歯の副葬例がありました。



●印:同形態です。



図にみるように多彩な骨角製品が出土した。その中に、上述の小竹貝塚製品に近似する垂飾品があった。遺跡間の交流があったことは間違いない。
戸田哲也ほか「神奈川県小田原市羽根尾貝塚 2003」

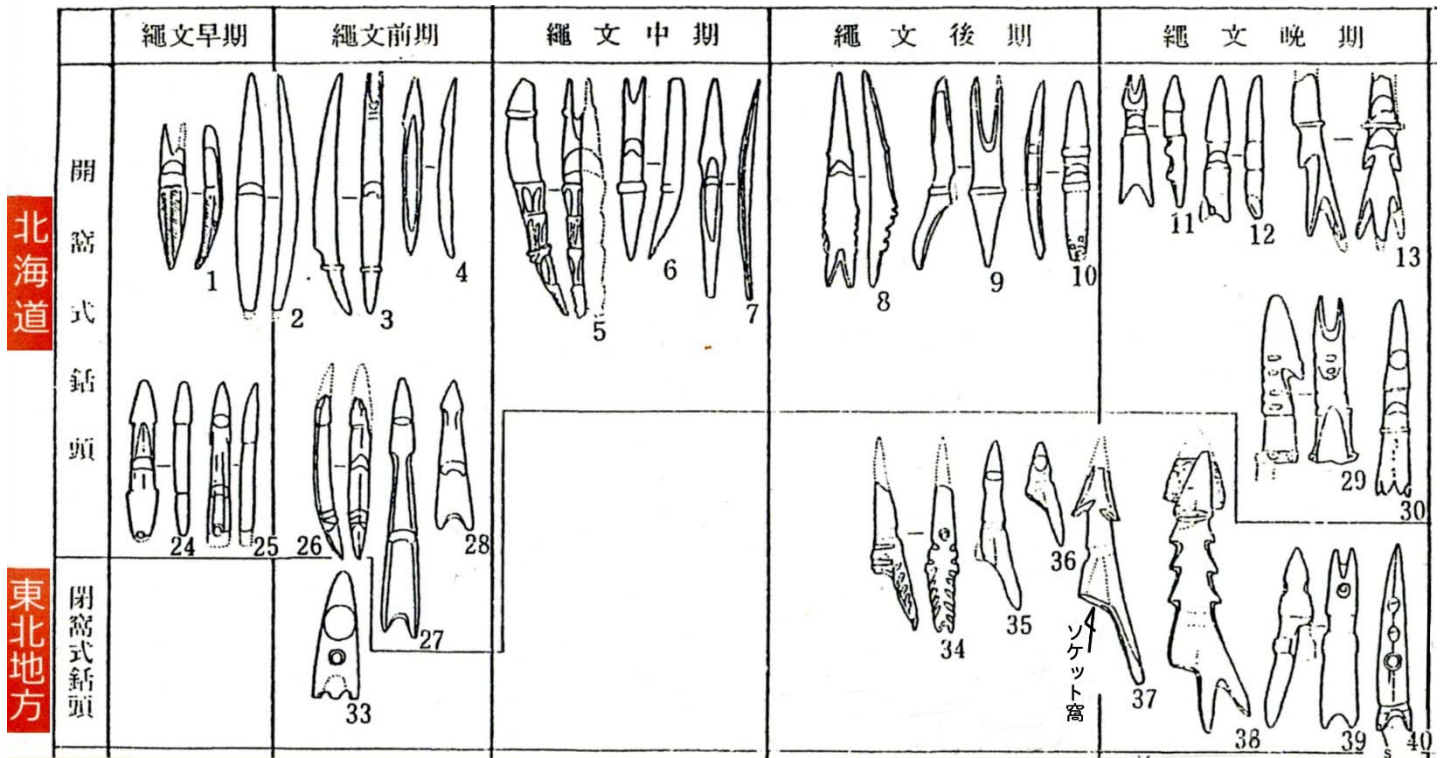
←小田原市 羽根尾貝塚 関山Ⅱ式期

参考図 銚頭形態の一覧

文献:歴史公論 5.1976.1 金子浩昌 銚頭の変遷

縄文時代北海道・東北・関東地方における骨角製銚頭の形態変遷とその系譜(紙幅の制約のために編年,形態上の位直づけはかなり窮屈になった。(すべて約1/2))

銚頭の変遷図 -各地、各時代の人々の努力の結晶です。



- 1・2: 釧路市東釧路, 3・4: 伊達町北黄金, 5・6・7・10・12: 島牧村栄磯
- 8: 戸井町戸井, 9: 礼文島船泊, 11: 乙部町三ツ谷,
- 13: 上磯町久根別, (以上北海道開窩式)
- 24・25: 八戸市長七谷地, 26: 北津軽郡オセドウ, 27・28: 八戸市一王寺,
- 29: 陸前高田市瀬沢, 30: 木造町亀ガ岡 (以上本州開窩式), 33: 宮城県七ヶ浜田大木囲,
- 34・35・36: 石巻市南境 37: 陸前高田市瀬沢 38 : 石巻市沼津,
- 39・40: いわき市寺脇

新石器時代(縄文時代)銚頭の多彩な発達です。開窩式の発達する北海道の遺物が見事です。

東北地方も閉窩式銚頭発達を中心となり、さらに有孔銚頭発達を中心となる。

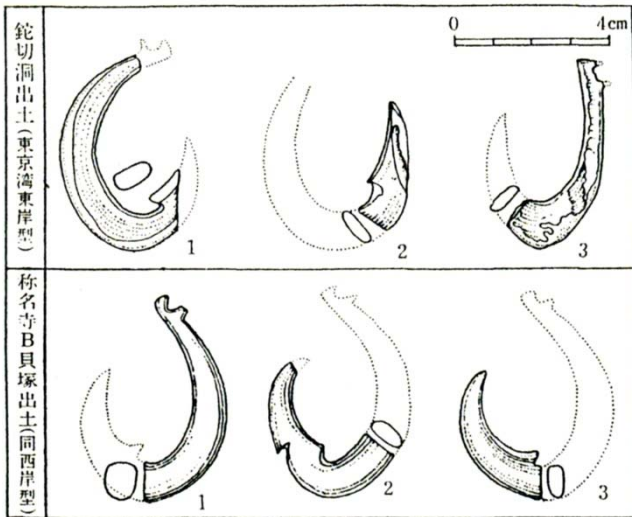


図:後期初頭の釣針(実際に使用された釣針は破損が著しい。点線は推測して復元したもの)
 上段1~2は曲軸系の釣針で、下段のものと同じつくり。
 3は軸が曲がらない直軸系。下段1~3はすべて曲軸系。

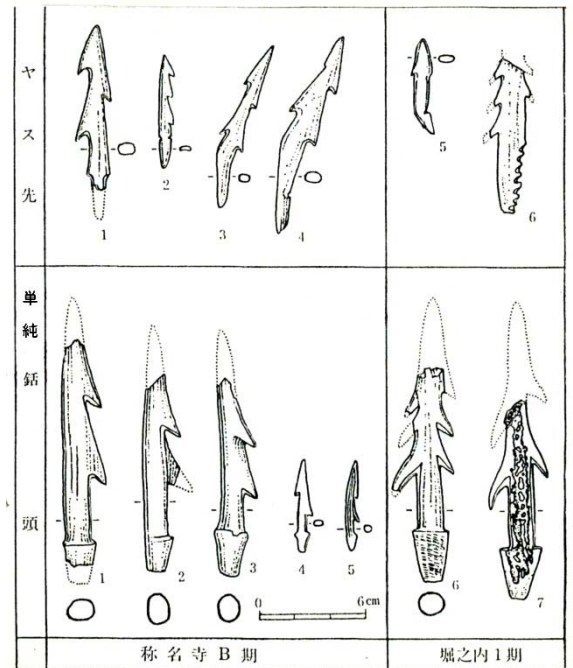
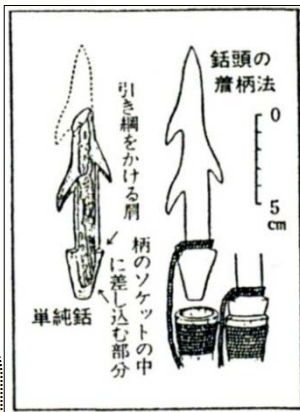
鹿角製の釣針の中で最もていねいなつくりである。釣針の効果を考えてつくった。素材の扱い方から特徴がみられる。類品を見ることは少ない。

↓ 横浜市称名寺貝塚

関東地方ではこの単純鉈頭を中心として発達しました。

称名寺貝塚A・B貝塚、そして堀之内1期の貝塚例です。

東京湾湾口部地域です。



鉈頭の形態分類

①鉈頭: ソケットに柄の先を挿入する。

②単純鉈頭: ソケットはない。

(1)-鉈頭 a:開窩式鉈頭-ソケットは皮などを巻いてつくる。

b:閉窩式鉈頭

(2)-単純鉈頭 a:有肩式

b:有孔式

鉈頭をつくるために、鹿角をどのように使ったか。これは大切な問題です。長い角ですが、どこでもという訳には行きません。逆鉤を長くとれるようにするには、場所が限られます。

この角の写真を良く見て下さい。表面の顆粒の発達の仕方が違います。それを心得てつくるのです。また枝の出方も違います。そして、内部のスポンジ質の在り方です。剥片石器が唯一の道具だったのでしょう。本当に大変な仕事でした。



福島県いわき市大畑C貝塚

←この鉈頭は、右端にある横浜市稲荷山の例にみるように、関東地方系の鉈頭です。いわき市で出土した唯一の資料です。称名寺系の単純鉈頭の北限です。これより北へは何故か、小さくなり形も変わりますが、それでも宮城県大船渡湾辺りまでみることができます。

北海道

貝塚の形式が少ないので動物骨からの調査が限定されます。

エゾシカ

遺物として遺されている陸獣の主体です。

ヒグマ

北海道を代表するけものですが、遺跡の出土は少ない。少ないというか、不明の状態。時代が新し

くなると頭蓋骨の集積例はある。

海獣類=アザラシ類、トド、アシカ、オットセイなどの鰭脚類・イルカ類、鯨類

海獣類を狙って海岸地帯に生活の拠点をつくりました。その遺跡を各地にみます。こうした動物たちの回遊域に当たっていました。

(例)噴火口沿岸域=オットセイの回遊域に当たっていました。

銚頭がつくられます。「開窩式銚頭」でつくりました。北海道独自の形態です

北海道の縄文時代狩猟

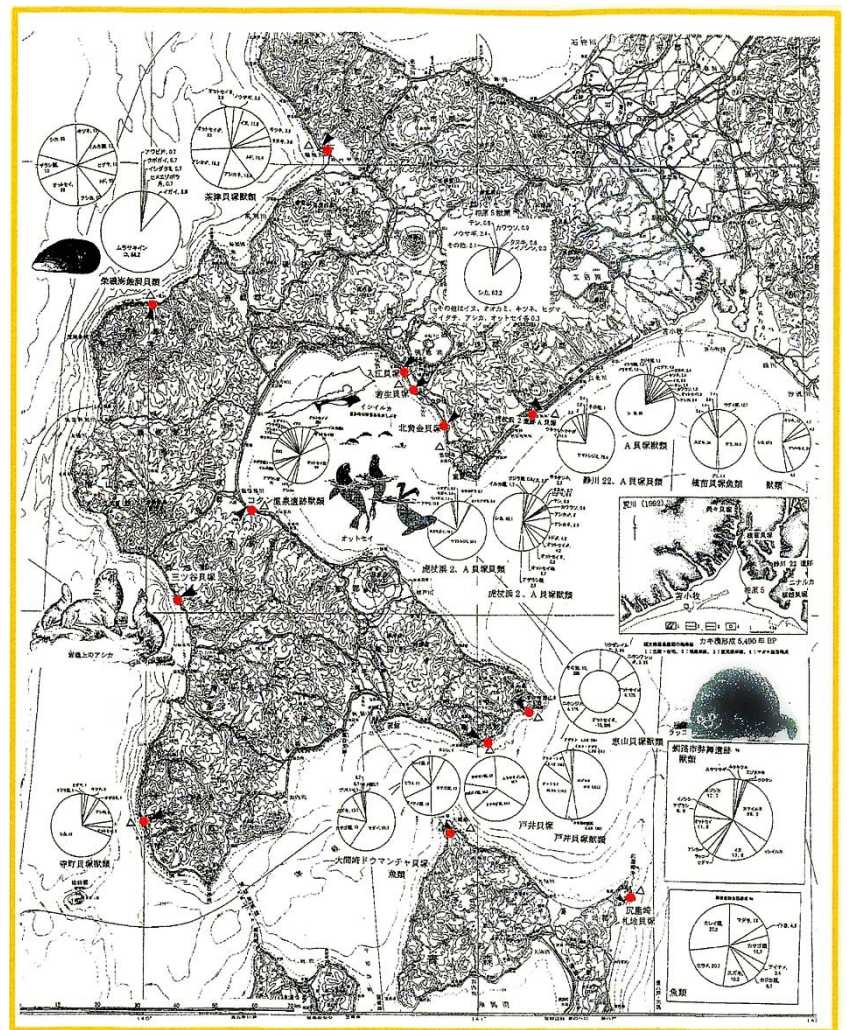
土肥研昌 2017 考古学ジャーナル 694
「北海道における縄文時代の動物遺体」より
ここでは「獣類」中心にしました。

北海道では縄文時代の貝塚遺跡は 79 地点が確認されている。

北海道を流れる大きな河川である石狩川、天塩川、十勝川河口域に分布がない事が読み取れる。

地形的にはむしろ丘陵が沿岸部に迫り中小の河川が複雑な谷を開析し、海進期に内湾が生じた場所に貝塚が残されている。もちろん大きな河川の支流域は縄文時代の遺跡多数が存在し、遺物包含層に焼骨が多量に含まれていることも少なくない。この場合、焼骨の大半はニホンジカで、縄文時代後・晩期にはこれらにイノシシが混じる。
北海道南西部の貝塚

津軽海峡地域の西部日本海側には中期末葉~後期初頭の貝塚がある。松前町寺町貝塚層は貝類が 8 割を占、哺乳類では 7 割がニホンジカで、鰭脚類アシカ、オットセイが 2 割を占める。津軽海峡東部には、中期末~後期初頭の戸井貝塚がある。哺乳類ではニホンジカが 5 割、鰭脚類



上図は、金子浩昌、先史時代北海道の狩猟漁労活動の歴史
北海道立埋蔵文化財センター、年報 7,2005

のオットセイを主に、アシカ、アザラシが 5 割を占める。

特集 食文化と考古学—縄文時代の動物遺体—

噴火湾沿岸地域

貝塚の分布は噴火湾東岸に集中し、西岸部は少ない。前期前葉~前期後葉にかけて、ハマグリ主体の貝塚がある。前期後葉にオットセイの雌、若獣、幼獣の出土量が多いことも指摘されている。

このほか、中期~後葉の八雲町コタン温泉遺跡の哺乳類では、オットセイが5割を占め、若獣、幼獣が多い。

積丹海岸地域

中期の余市町大谷地貝塚やフゴッペ貝塚、後期の泊村茶津洞窟遺跡、小樽市恵比寿神社遺跡がある。中期~後期の泊村茶津貝塚では、多種の貝類のほか、哺乳類の鯨脚類のオットセイ、アシカ、トドで8割近くを占め、ニホンジカは僅かに混じる程度である。

苫小牧低地帯地域

この地域の貝塚は前期の海進期の貝塚が主で、千歳市美々貝塚北遺跡、苫小牧市美沢4遺跡、植苗貝塚、柳館貝塚、静川22遺跡などがある。哺乳類は、ニホンジカがほとんどである。

縄文時代前期の白老町虎杖浜2遺跡がある。哺乳類ではニホンジカが約5割を占め、次いでオットセイ、アシカなど鯨脚類が3割を占める。

釧路・厚岸海岸地域

東釧路貝塚の哺乳類では、海獣類が多くイルカ類の頭骨を放射状に配列するなどの儀礼的な出土状況が見られる。晩期では釧路市弊舞遺跡の哺乳類では、ニホンジカ、イシイルカ3割、海獣類ではカマイルカ、イシイルカ3割、鯨脚類のオットセイ、アザラシなど約2割より多い。天寧1遺跡と両遺跡から、ラッコが少数出土し、イヌの出土量が多い共通の特徴がある。

道北の礼文島には、縄文時代後期の船泊遺跡がある。離島のためニホンジカはほとんどなく、海獣類がほとんどである。中でもアシカが9割を占める。

北海道の縄文時代の貝塚は、哺乳類ではニホンジカ

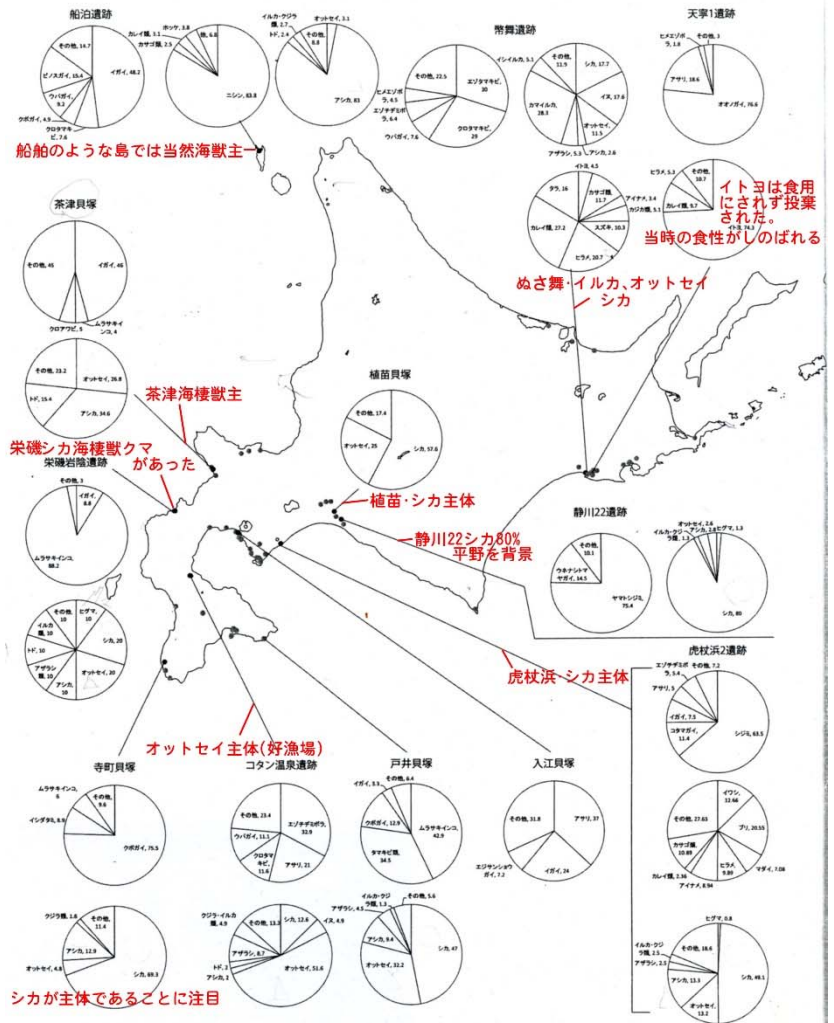
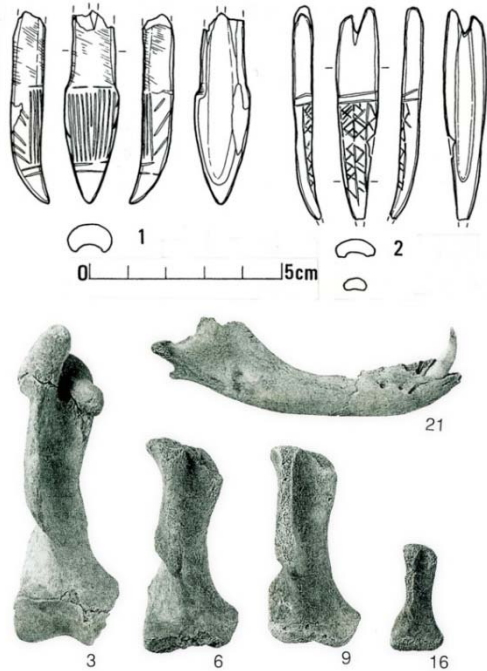


図1 北海道における縄文時代の貝塚分布と出土動物遺体

が全道の主要な種で、次いで太平洋岸ではオットセイが多く出土する。特に噴火湾岸では若獣・幼獣が多いが、これはオットセイの回遊習性に関係するものと見られ、日本海側北部では、アシカがオットセイよりも多く出土し、トド、アザラシは少ない。

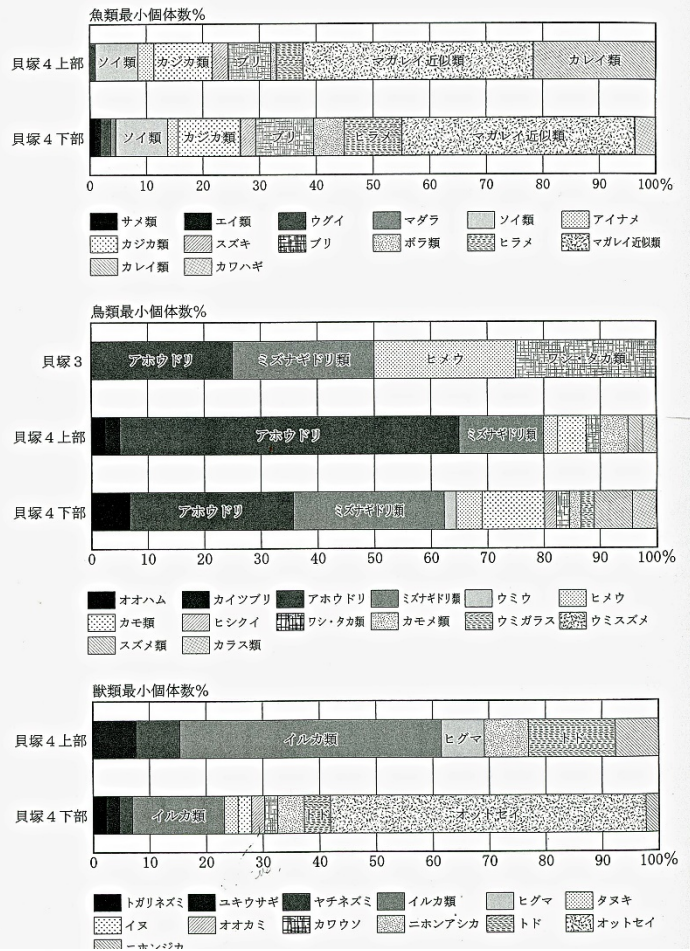
晩期の弊舞遺跡や、天寧1遺跡ではイヌの出現頻度が高い。出土するイヌは若獣が多いことや解体痕があり、オホーツク文化につながる北方地域の影響が晩期後葉までさかのぼり、イヌを肉や毛皮採取目的に飼育している可能性があるとの指摘がある。天寧遺跡から検出された魚骨層から、数万個は含まれていると想定されるほど、イトヨの遺体が含まれていた。この時代の価値観が変化する時期なのか、イトヨは食用とされず廃棄していた可能性がある。

東釧路貝塚の魚・鳥・獣類遺体 2010
 ・東釧路貝塚調査報告書Ⅱ2010.3
 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター



上段:前記、開窩式鉤頭、肋骨製(海獣類)、3・6♀ 9♂
 下段:オットセイ 21 右下顎骨♀、3~16 上腕骨、16 幼体 (1/2)

東釧路貝塚 魚・鳥・獣類%



今回の調査によって得られた動物遺体は、魚、鳥、獣骨のいずれも多種、豊富で北方地域での在り方をよくみることができた。カレイ類は内湾の砂底に多産し主要な魚種であったが、夏期には大形のブリの回遊があり、ボラ、カジカ類も多産する年間を通じて豊かな魚類資源があった。鳥類もまた豊富であった。夏期ではあるが大形のアホウドリの来遊は資源として重要で、羽毛、肉資源としてすぐれ、骨格は針などに使われている。この鳥を目当てにした捕獲があったのであろう。海棲獣もまた重要な資源であったが、それらをすべて集めても、なおここに生活する人々の数、集落の規模は限られたものと思われる。狩猟の主体はオットセイにあった。捕獲が雌主体であることは回遊集団の構成とも関わるのであろう。オットセイ雌成体の体長は145cm、体重63kgという。貝塚産オットセイ雌の最小個体数22個体であるが、成体とそれに近い個体で12個体、若幼個体で10個体と推定した場合、その総体重は1,164kgで、可食肉量(1/3廃棄)776kgとなる。今、仮に5家族(一家族4人として)20名に、1人148g/日を分配すると、20人分で2,960g/日になり、262日分の肉量が確保されることになる(1人148g/日というのは有名な狩猟民南アフリカ、カラハリ砂漠に棲むブッシュマンの一日の平均肉量で、欧米人は300g/日という。ブッシュマンというのは唐突かも知れないが、摂取肉量は現代日本人より多い。彼等の主要食物はメロンなどの果実であるが、「肉」こそ最高の食べ物という信条があるという。縄文人も同じではなかったか)。トド、アシカ類はオットセイ雌個体よりもはるかに大きくなったが(トド♂であれば10数倍、アシカで5倍)、遺骸の出土が限られた肢骨の一部のみであるので、分割されたようである。魚肉、鳥肉も考え合わせて1年分あまりが供給されていたのではないと思われる。

註 「エゾノウサギ」の和名は、門崎元昭『野生動物調査痕跡学図鑑』2009北海道出版企画センターによる。
 オットセイ、トド、アシカの体重は、西脇昌治『鯨類、鯨脚類』1965東大出版会による。さらに貝塚資料については、筆者の保管するオットセイ現生標本と比較して体長復元をおこなった。
 ブッシュマンについては、田中二郎『ブッシュマン』1971思索社による。

下北半島

下北半島における縄文時代の漁労活動

① 札地貝塚(東通村尻屋、縄文時代晩期)下北半島北端の海岸砂丘上に立地した貝塚。

ここからはアシカ類の骨格を多数出土した。その他の獣骨はほとんど見ることがなかったのでアシカを主目的とした捕獲活動の場であった。捕獲の方法が単純な撲殺などの方法によったのであろうか。頭骨で残されている標本はなかった。

② ドウマンチャ貝塚(大間町大間平、縄文時代晩期)下北半島西北端にある貝塚。アホウドリ(多数)、陸獣は少なく、アシカ類は大型の個体はあったが少ない。

③ 最花貝塚(むつ市、縄文時代中期末)むつ市にあり、やや大きな規模、本州最北端の内湾系貝塚である。ヤマトシジミを主体としている。魚・鳥・獣類の遺骸も多く、この地方に生息するニホンザルの遺骸も含まれていた。また、ツキノワグマの吻端部をのこす標本が二点同じ場所から出土している。それはちょうどアイヌの人々がクマの吻端と耳の部分の毛皮を残してクマ祭に頭を使ったのと同じ状態であったかも知れない。縄文期におけるクマ遺骸の出土例は少なくないが、頭部が一部でも復元できるような出土例はこれまでにない。

1967年(昭和42年)「下北半島における縄文時代の漁労活動 下北・自然・文化・社会・67030

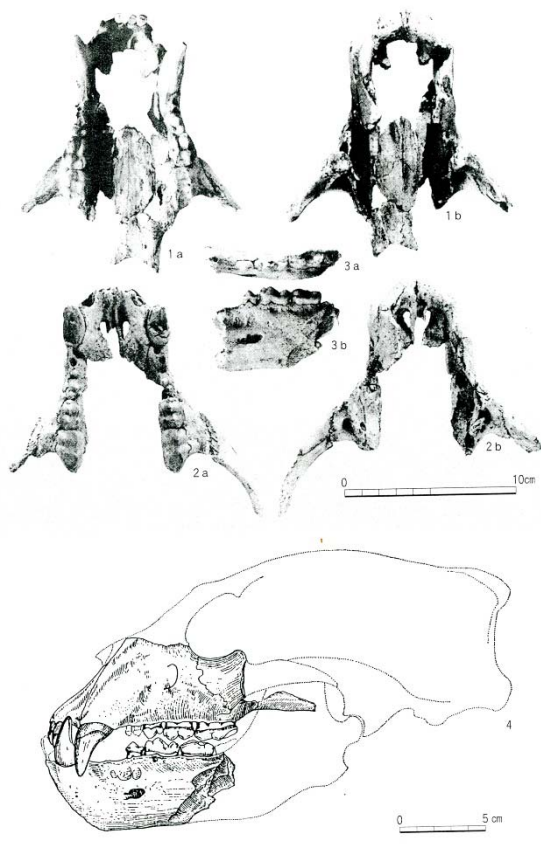


図18 最花貝塚出土のツキノワグマ 復元図
1a・2a, 顔面頭蓋の部分, aは頭蓋底, bは背面観, ただし, 1bは鼻骨や上顎骨の大部分を欠くので, 口蓋の裏面のみが見えている。3a, b, 左側下顎骨片, 4, 遺存部と全体の復元

宮城県

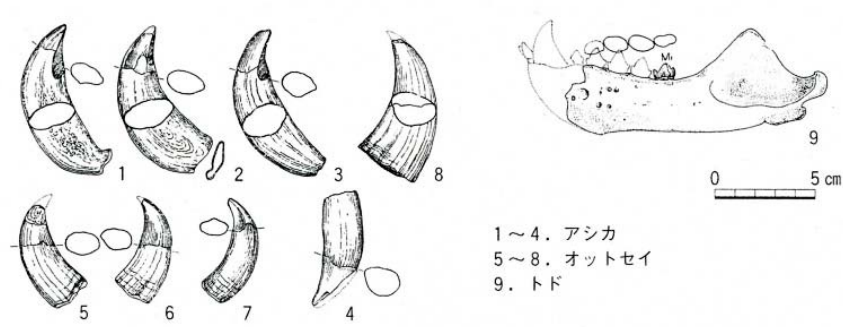
1968年昭和43年「縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について-宮城県大木圍貝塚の出土例を中心として-仙台湾周辺の考古学的研究 681211

縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について

アシカ類遺骸については、北海道あるいは本州北部の貝塚からの出土例が知られていたが、大木圍貝塚にも多いことに注意していた。また、オットセイの遺骸もあり、この地域での鰭脚類猟の実態を示すものであった。

大木圍貝塚(縄文時代前期大木 5・6期) アシカ科海獣骨にはトド雄の若い

個体、雄の成獣、アシカ類の若、成獣、オットセイの雌の成獣と雌雄の若獣の個体が含まれていた。頭骨、



1～4. アシカ
5～8. オットセイ
9. トド

アシカの下顎骨とアシカ・オットセイの大歯

四肢骨は完存する標本はほとんどなかったが、下顎骨には若、成獣個体のものがよく残されていた。

関東地方における縄文時代の動物遺体—東京湾における大型貝塚の一樣相—

市原の貝塚

養老川の下流域を中心に40カ所ほど縄文時代の貝塚がある。西広貝塚は、養老川下流域右岸の標高42mの台地上に立地する。この台地を「国分寺台」と名付けられ、全国的にも著名な遺跡が存在する(図1)

動物遺体からみた西広貝塚の生業活動

西広貝塚から検出された動物遺体は、貝類・魚類・哺乳類・鳥類など100種類以上に及ぶ。(図3)

狩猟活動

哺乳類は「各時期と共にシカとイノシシが多い。特に晩期層から大量に出土し、同定資料数のほぼ70%

を占める。シカは下顎歯の萌出段階からは、成獣の割合が、シカは後期46%・晩期62%で、若齢の個体が多く捕獲されている。同様の結果はイノシシの四肢骨端部がの融合状況でも認められることから、多産で繁殖力が高いイノシシの年齢構成を反映したものと捉えられる。また、後期後葉には生後間もないイノシシの埋葬が確認され。母イノシシとともに捕獲された個体が一時的に飼育された可能性がある。

(鶴岡英一「市原市埋蔵文化財調査センター」考古学ジャーナル 694,2017)



図1 西広貝塚の位置

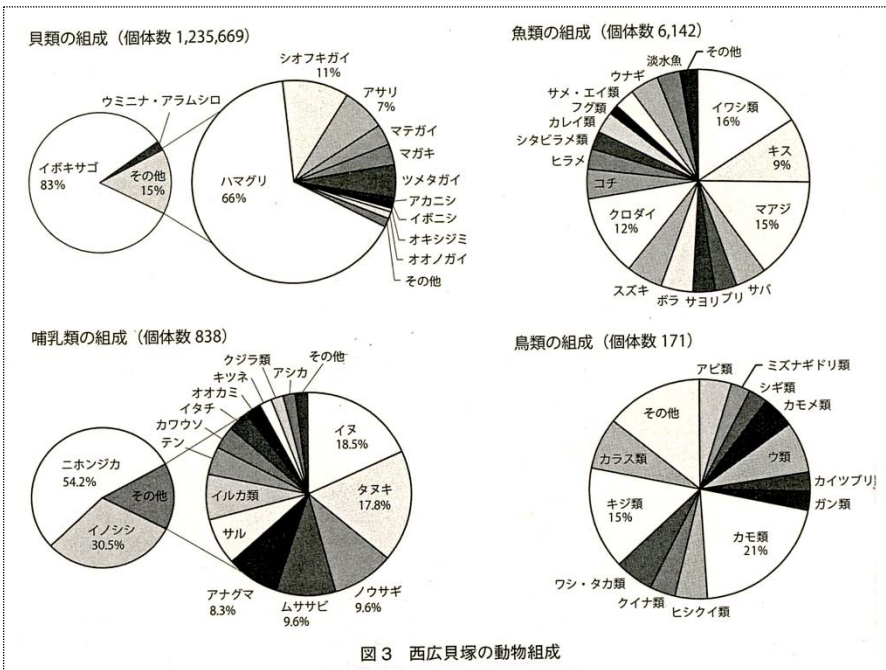


図3 西広貝塚の動物組成

西広貝塚

縄文人の蛋白質食料として、シカ、イノシシは余りにも少ない。魚肉を加えてもさして変わらない。それでは、貝類と小さなイボキサゴも集め、殻をこわして肉をていねいに食べた。破碎の貝層が積み上がった。それとて一粒が何と小さいことか。

植物質資源に注目していたことは当然で、出来る限り利用を考えていたはずである。採集加工の方法を考え調理したのであろう。もちろん、僅かであったが、魚・貝と併せて、主食ともなった。

イノシシ幼体の埋葬例

生後3.5ヶ月前後の幼体の埋葬例(乳歯 dm4 の萌出前後)をみることもある。おそらく解体されることはな

かったであろう。このような幼体を得る機会が雌成獣の捕獲の機会があれば、飼育をしてみようと云う気持ちがあったかも知れない。しかし、それが徒労に帰したとき、埋葬するか、食用にしたか、個々人によって違ったようである。多くの場合、飼養とまでは行かなかった。幼体骨の出土自体少ないからである。若い個体の骨が特に多いと云う例もない。別記した例を除いて(山梨県金生遺跡例は特に若齢個体の骨の一部を選んで行った祭礼的行為である。)



山地
 丘陵
 下末吉面
 武蔵野面
 立川面
 沖積面
 東京湾

★①側ヶ谷戸貝塚 ②水子 ③大谷場 ④関山 ⑤黒浜 ⑥花積

第1図 側ヶ谷戸貝塚の位置 (笹森ほか (1987) に支谷と遺跡名を記入)

このイノシシ1頭で一体何人の縄文人が過ごしたのでしょうか。そして、どのくらいの間。

縄文人は何と辛抱強く、仲良く暮らしたのでしょうか。それでも有り難く、頭の骨を住居の真ん中に埋めました。うり坊すら手に入らなかったのです(後書参照)。私はこの現場をみて涙がこぼれました。でも立派なイノシシが手には行ってよかった。それと比べれば、倉輪の縄文人はよかったけど、捕り尽くしてしまいました。他の島のイノシシも。



側ヶ谷戸貝塚 (イノシシ)前頁と同じ。

埼玉県花積貝塚出土の動物遺体

このようなイルカ頭蓋骨の出土は大変珍しいので、特に取り上げました。遺物は現在さいたま市にある埼玉県立歴史と民俗の博物館に保管されています。→

獣類:イノシシ、シカ、クジラ、アナグマ、タヌキ、イヌ、ネズミ

昭和43年資料

花積下層期

鳥、獣類:カモ類、イノシシ、ニホンジカ、が僅かにみられたのみであるが、黒浜、諸磯期の一般的な出土状況がさらに少ないことと比べれば、多い方であったと思われる。

縄文時代中期

獣類:イノシシ、シカ、の出土は縄文時代前期よりも増加し、バンドウイルカの頭骨がほぼ完存する状態で出土しているが、底部は壊されていた。イルカを祭ったのだと思います。



図27 花積貝塚のバンドウイルカ頭骨出土状況(歯が並んで出土している)

昭和45年・1970年「花積貝塚出土の動物遺存体

花積貝塚発掘調査報告書

埼玉県遺跡調査会報告 第15集 700303

伊豆・八丈島の縄文時代イノシシ

倉輪遺跡出土のイノシシ遺体—倉輪遺跡:十三菩提~五領ヶ台式~勝坂式、前記末~中期初

文献:東京都八丈島倉輪遺跡、東京都八丈島町教育委員会 1987

金子浩昌・動物遺存体、骨・角・牙・製品

本遺跡における獣骨の主体を占めるものであって、その量もまたかなりの数が出土した。発掘の当初においては獣骨として出土するのはすべて焼けて細片化したもので、歯や骨格などでその形を留めるのは一つもなかったのである。ところが、第6次の調査において、堅穴状遺構にまで発掘が進展するに及び少なからぬ量の歯や骨が出土するに至ったのである。これはイノシシのみでなく他の魚骨などについても同様のことがいえ、ここには骨塚状のものがあったことが判明してきた。そしてこのような骨の保存が可能にな

ったのは、遺構を埋める覆土中に多量の灰が混り、部分的には灰層によって覆われるといった状態がみられたからと思われる。第1号堅穴状遺構においてそれが顕著であって、獣骨もそこに集中する形となった。ただ、残念なことに骨の保存を完全にする程には至らなかったためと、土圧による骨の破壊が強かったため、そして発掘との障害もあって、かなり破損した状態でしかとりあげられなかったのは残念であった。そのような事情がありながらもできる限り、標本の採集に当たった。

第12表 イノシシ出土量表

地点	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 *3 p S d	hum 上腕骨 p S d	rad 橈骨 p S d	ul 尺骨 p S d	mc 中手骨 p S d	pel 寛骨 p S d	fe 大腿骨 p S d	tib 脛骨 p S d	fib 腓骨 p S d	ta 距骨	ca 踵骨	mt 中足骨 p S d	dig 指骨 I ② III
2号住	r			1	1		①		2					1	mc or mt II or V	
	l						①									
堅穴状遺構	r 乳突起		at 4	5	②1	1 1	1		1	1fr	1		4	2		基2
	l			6	①lfr	2	1	lv	1 2 3				2	5		基(IV)
	r occ.		椎体5					尺側手根								中節5
	l zygo, temp			①5												
同5区	r		C 3				met 2									
	l						lnxt									
各区	r 後頭頂		T 1	2	①	別	①			①						基節2
	l		L 2		①	1							1			中・末節各1
	r temp		肋 9													
	l ~occ.															
	r		T 1			1			1 ①				1			
l zygo2		L 3		2	1		lv	2 ① 1	1	1	1(ep はずれ)					
r occ~		肋 7														
l fro								1 2								
r temp																
l ~occ.																
r																
l parie																

下顎骨は別表の歯牙表に示す。

*1 occ 後頭骨、par 頭頂骨、tem 側頭骨、fro 前頭骨、inc 切歯骨、zygo 頬骨、hyo 舌骨

*2 At 第1頸椎、Ax 第2頸椎、Cer 頸椎、T 胸椎、L 腰椎、S 仙椎、Cau 尾椎、R 肋骨

歯牙

多くの歯が出土している。それらの保存の状態は第15表に示す通りである。それにもみられるように第1号竪穴状遺構及びその周辺に分布している状態がよくわかる。上顎骨、下顎骨としてのこるものもあり、それら左右ののこされるものもある。左右がのこるのは、その場所に頭骨があったとみてよい。事実、竪穴状遺構上部の灰層中に仰転した形で頭蓋の埋存していたことが確かめられている(図版6-B)。なお、この頭骨の上顎の犬歯は抜かれていた。

上顎歯の標本の中で歯列長の計測できたのは次の通りである。

P2~ M3:102.0 (♂)、97.6(♂)

95.3(頭骨全長 338.0)、

99.0(頭骨全長 347.4)

P4~ M3: 74.8、 72.0(M3

の後端が完出していない)、

70.35(2>の標本を計測)

76.0、 75.0(現生)

硬口蓋左右幅

左右 P4 位置での幅

(歯冠部分で計測) :57.8

56.3 (近畿産現生標本)

左右 M3 位置での幅

(歯冠部分で計測) :67.6

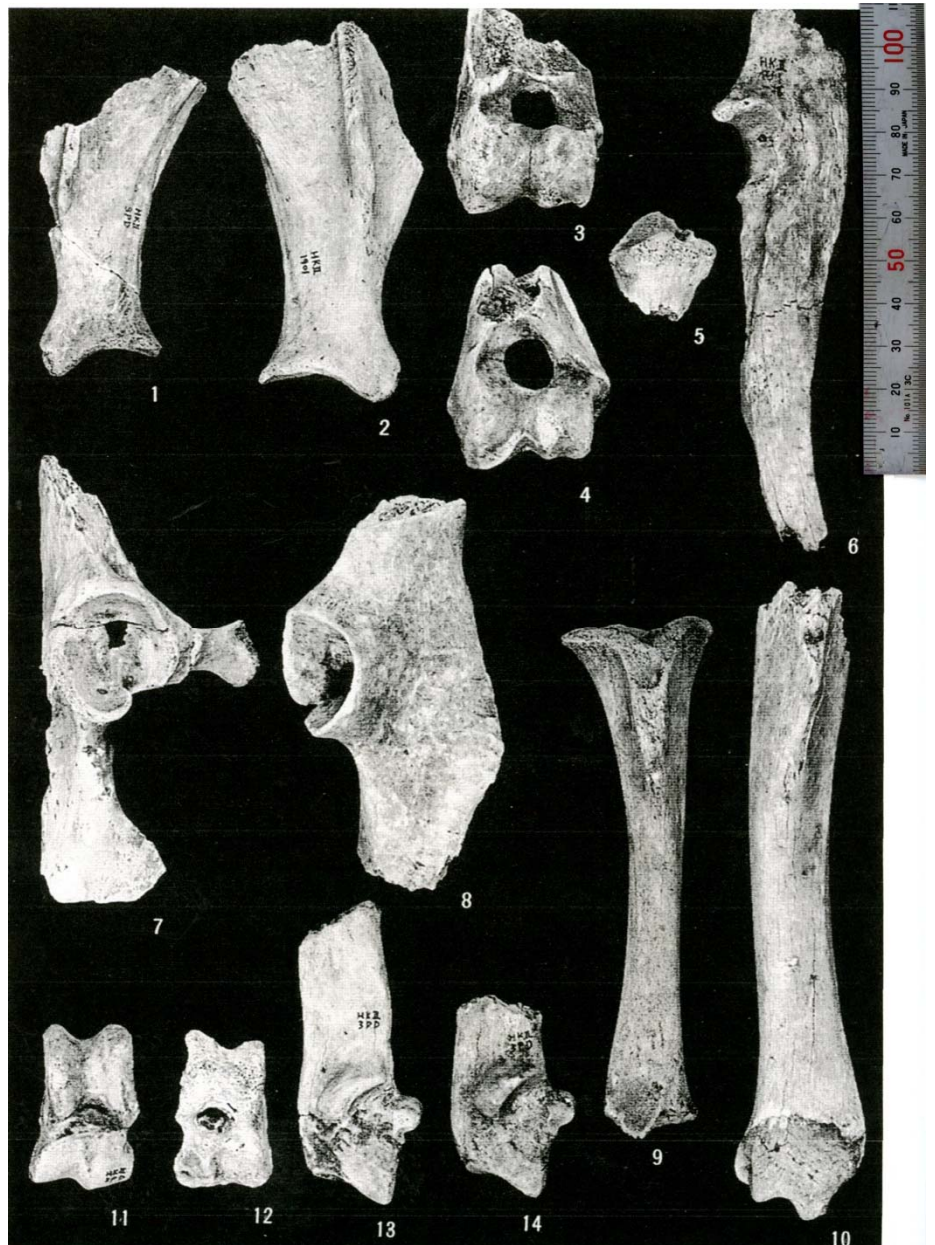
64.0、67.3(//)

倉輪遺跡出土のイノシシの頭蓋を本土産(房総半島での貝塚資料)のものと比較すると17~20%は小さい。また、M3の最大長の計測値では縄文貝塚産(千葉県西広貝塚、後期)平均35.65(N=37)、倉輪遺跡31.25(N=43)あった。本土産のが変異幅が広いのに対して、倉輪産のは大きさのばらつきが少なく、本土のイノシシに対して小型のイノシシであったのである。

ところで、このようなイノシシが縄文時代の八丈島でどのような状況で人々と接するところとなっていたのか興味

ある問題であるが、この場合まず本遺跡で知られたような本土産のものと比べて小型のイノシシはすでに早期の平坂式期に属する大島下高洞A遺跡で知られることが注目される。そして、この時期と同時期の遺跡は八丈島でも確認されている。とすると八丈島でもこの時期に、大島におけるのと同様にイノシシがいたことも考えられ、その後裔が倉輪遺跡のイノシシである可能性もある。若し、そうでないとすると、この倉輪遺

1・2:肩甲骨左右 3・4:上腕骨左 5:橈骨左
6:尺骨左 7・8:寛骨右左 9・10:胫骨右左
11・12:距骨左右 13・14:踵骨左



跡の時期になってはじめてイノシシがもたらされたわけであり、そのための供給地を考えなくてはならない。そのような供給地があったかどうか、例えば大島の鉄砲場岩陰遺跡のような倉輪遺跡と併行する時期の遺跡でイノシシの出土が確認されてはいるが、それ程の供給量が、大島の諸遺跡にあったかどうかは問題であろう。

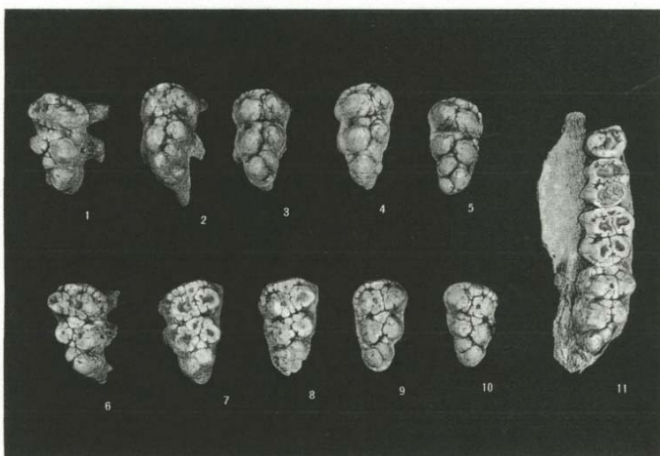
こうした問題と関連して、倉輪遺跡出土のイノシシの歯牙の咬耗状況から、その捕獲季節を推定したのが第15表である。これによると、満1才の年齢のものを除いて、2.5才までの個体のものは、季節による差が認められ、秋から冬、春にかけてが多く、夏に少ない。このような捕獲の状況は本土における一つの例、例えば愛知県田原町伊川津貝塚での調査結果と同じ傾向を示している。このことは、八丈島でも同じような狩猟活動があったことを推測させるのである。ただ、1才の

個体の少ないことは、あるいは島という条件を考えての資源保護のための配慮があったかもしれない。島での厳しい生活環境を充分認識していたからではないかと推測するのである。

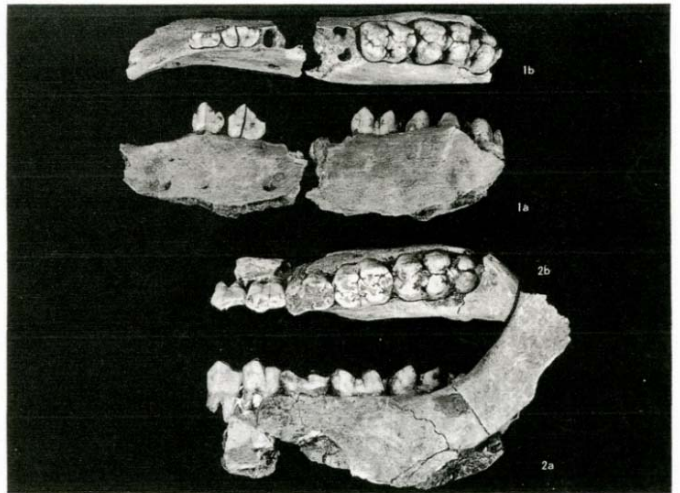
伊豆の島々は元からイノシシが生息していました。縄文人はそれを目当ての一つとしてわたりましたが、それを獲りつくしてしまったと云うことでしょうか。



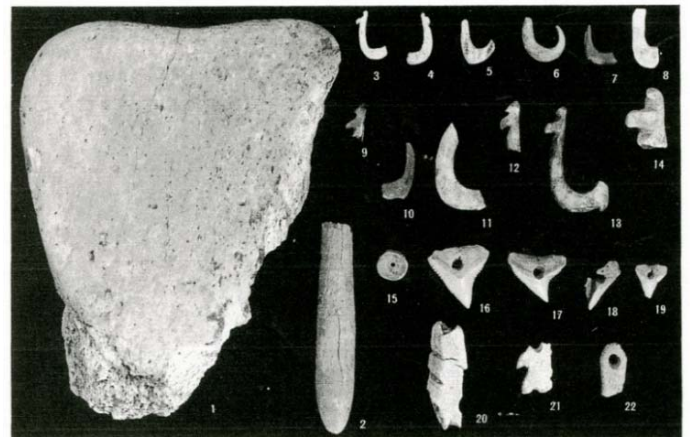
A. イノシシ上顎骨及び歯 (S=1/1) 1. 上顎骨片 2. 左上顎骨片



B. イノシシ顎骨及び歯 (S=1/1) 1・5・6・10, 右M¹ 2・4・7・9, 左M¹ 11, 左上顎骨片



A. イノシシ下顎骨 (S=1/1) 1・2a-b, 左下顎骨片



B. 骨・角・牙製品 (S=1/1)

1. 骨製加工品 2. 刺突具断面 3-14. 釘針骨: 3・4・6-10, 13. 鹿角: 5・7・11-12-14. 犬歯: 1・2・6・7の各製品
15. サメ種体穿孔品 16-19. サメ(ツマノサ)体穿孔品 20-22. 骨針頭部



金生の問題と並んで佐渡・伊豆のイノシシの問題があり、それは縄文人が連れて行った、そこで飼っていたという話になります。

私に言わせると島で飼ったのなら、本土でなぜ飼わないの。それで一生懸命飼育したイノシシを探そうと研究している研究者もいます。

倉輪遺跡はその問題の一つです。

第15表 イノシシ臼歯の萌出と咬耗状況による捕獲季節の推定と捕獲の最小個体数

年齢 季節	0.5才未満	0.5才	1才	1.5才	2才	2.5才	2.5才以上
	夏	秋-春	夏-秋	冬-春	初夏	秋-	
咬耗の程度を示す 咬耗記号	M ¹ <M ² >	M ¹ <M ² >	M ²	M ²	M ³	M ³ 完出直前	M ³
<> 未萌出歯 : a					{L 1 R 0}		
- 萌出途中 咬耗なし : b	L 2 R 6				{L 3 R 6}		
+ 第1咬頭 + エナメル質 咬耗 : c			{L 4 R 2}		{L 5 R 5}		
+ + 第1-2咬頭 + エナメル質 咬耗 : d	L 2 R 4		{L 3 R 3}		{L 6 R 1}		
+ + + M ² 第1咬頭 穿孔孔 : e			{L 8 R 2}		{L 4 (M ₃) R 2 (M ₃)}		
+ + + M ² : f				{L 0 R 9}		{L 8 R 11}	
+ + + + M ² 穿孔孔が連続 + + + + M ³ : g						{L 7 R 4}	
+ + + + M ² : h						{L 1 R 1}	
⊕ + + + M ² 全面露 + + + + M ³ : i							
⊕ ⊕ M ² + + + + + M ³ : j						{L 0 R 1}	
a-dはM ² , M ³ の 咬耗状況 e-jはM ² , M ³ を示す。							
計	L 2 R 6	L 2 R 4	L 4 R 2	L 11 R 14	L 4 R 6	L 15 R 8	L 16 R 17
伊川津貝塚例*	5	27	10	18	13	28	44

歯の磨耗状況

<> : 未萌出
+ : エナメル質咬耗
++ : 小窩独立
+++ : 同連結
⊕ : 全面露

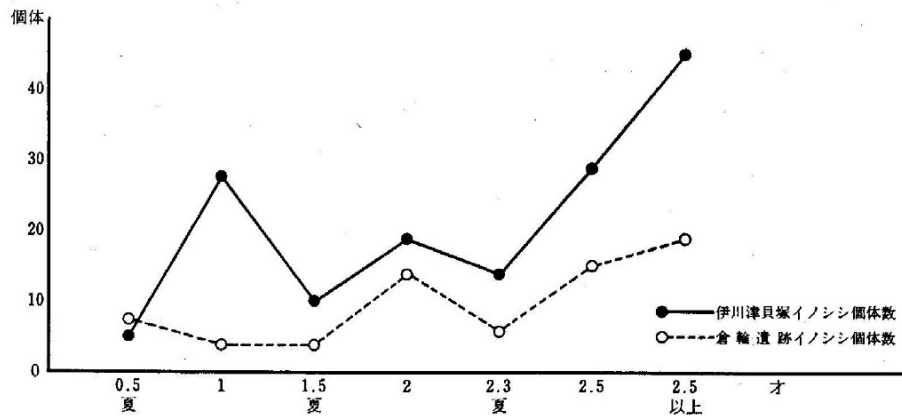
— dm₁, M₁, M₂の場合

a : <>
b : -, -
c : +, -
d : +, +
e : ++, +
f : ++, ++
g : ++++, ++
h : ++++, +++
i : ⊕, +++
j : ⊕, ⊕

— M₃の場合

a : <>
b : -, -, -
c : +, -, -
d : +, +, -
e : +, +, +
f : ++, +, +
g : ++, ++, +
h : ++, ++, ++
i : ++++, ++, ++
j : ++++, ++++, ++
k : ++++, ++++, +++
l : ⊕, ++++, +++
m : ⊕, ⊕, +++
n : ⊕, ⊕, ⊕

*新美倫子氏（東京大学文学部大学院）、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）による。



3. 獣類

イノシシはかなりの量の歯牙骨格が出土した。本土における同時期の遺跡で、これ程の量を出土した例はないであろう。獣骨を多く出土した地点が、種々の遺物の集められた集石状遺構ではないかと考えられており、獣骨の多いのもそうした特殊な遺構と関連があるらしい。イノシシは歯の数が四肢骨よりもはるかに多く、頭蓋や下顎骨が集積していた可能性がある。ここから出土したイノシシの歯は本土の貝塚から出土

するものより小さく、上顎 M3 でその長さが倉輪産平均 31.25 (N= 43)、房総半島の後期貝塚例（中期資料が多くないので）平均 35.65 (N=37)、そして本土産のは大・小のばらつきが大きい、倉輪産には小さい型のものがよく揃うという特徴がある。このようなイノシシは本土から直接はこぼれたものではなく、大島や八丈島にのみいた集団であろう。なお、シカの歯は無く、骨角は加工品以外は全く見られなかった。

金生遺跡出土の獣骨 金子浩昌

山梨県北杜市(旧北巨摩郡大泉村)大泉町谷戸寺金生1977年調査・縄文時代後・晩期を主とした集落址
金生遺跡の獣骨は稀有な例で、縄文時代のイノシシ飼養の問題でよく話題にされますが、慎重に扱いたいと思います。

1. はじめに

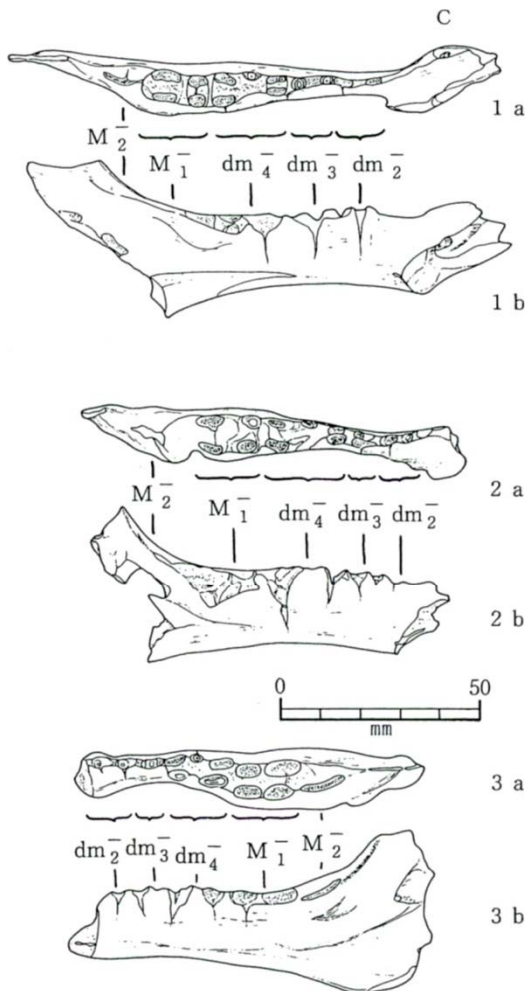
イノシシ焼骨の発見

金生遺跡の一つ A 遺跡と称された地域で多量の獣骨が出土したと云う知らせを受けたのは、この地域の発掘調査も最終の段階に至っていた昭和53年11月25日のことであった。資料の確認と今後の対応のために牛沢百合子君が現地に向ったのはその直後である。そして、それらが大部分イノシシのものであること、しかもそのすべてが強い火で焼かれているものであったと云うことが確認された。さらに、そ

れらが若い個体のもので、かつ下顎骨のみという特定の部位を集めたものであることも牛沢君によって直ちに確認されていたのである。

このような骨の在り方は、筆者らがこれまで、日本の各地でみて来た骨の様相とは大変異なるものであった。またもちろん山梨県下でこれに類した骨の検出はこれまでにかつてなく、調査関係者の間でも少なからぬ驚きの気持ちをもって注目されたのである。

本遺跡で検出された獣骨は下記の4種である。今それらの記載に当って、獣骨の顕著な出土をみた、三つの地点、つまり8号土壌、石組及び一般包含層、30号住居址内のそれぞれに分けて標本の在り方、形質の概要を記述していきたいと思う。



第153図 イノシシ下顎骨歯槽による歯の位置と名称

これらの下顎骨は犬歯の歯槽部分が調べられないので雌雄不明。但し、雌の可能性が大きい。

cは乳犬歯、dm 乳歯、Mは臼歯
M₂は歯槽部に幅の狭い切れ目が出来た程度である。

3. 獣類の焼骨

1. 8号土壌の獣骨 イノシシ *Sus scrofa*

8号土壌からは最も多くのイノシシの骨を出土している。そして、その大部分は下顎骨であったが、本遺跡のイノシシの特徴は年令別の構成が明瞭にみられる点であって、大量の当オの個体と、それよりも数の少ない2~3才以上の個体の下顎骨であった。以下、これらの標本を年令グループに分けて説明する。

検出された獣類種名表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
哺乳綱	Class Mammalia
食肉目	Order Carnivora
クマ科	Family Ursidae
ツキノワグマ	<i>Selenarctos thibetanus</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウシ科	Family Bovidae
ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>

A. 当才の下顎骨群

当才の下顎骨は全標本の83%を占めるもので、その出土量は最も多かった。しかし、標本自体は破損するものが多く、骨体を良くのこす標本はごく一部であった。これは、若い個体の場合は、骨質が十分に骨化せず、骨壁も薄いために、強い火を受けるとその損傷はひどく、ひび割れ、変形し、その破損を著しくするからである。特に歯牙の部分の損傷はひどく、年令の唯一の決め手になる歯の欠損は個体毎の微妙な違いを見出すことを不可能にした。そのために、歯の萌出状況、大きさがその目安となり、それを歯槽の形態から判断した。

この顎骨群は、乳歯 dm4 までと、永久歯 M1 までが萌出し、M2 は未萌出、ただし、M2 の歯槽をおおう骨に幅 5~6 mm 位までのき裂が生ずる位の段階までのものである。

標本

下顎骨の左右が連合(左右の顎骨関節は骨化接合する)する状態にある標本が最も多いが、これには、a) 連合部分のみの採本。b) 骨体がある程度のこる標本(dm4 の歯槽のあたりで折れる)。c) 左右が分離している標本。これは稀で、犬歯歯槽部近域で折れるものが多い。上記 a) に接合するものなのであろう。d) 骨体と枝骨部分をのこす標本でこれは極く稀である。e) 下顎骨、枝骨部分のみの破片。関節突起、筋突起などが破片となって検出されている。

以上 a) と c)、あるいは e) には同一個体のものがあるはずであるが、それらの接合関係を見る作業は充分に行われていない。標本が小さいことと、犬歯歯槽部の破損であるために、殆んど原型を失なっていると考えられるからである。

以下 a)~e) について若干の説明を追記する。

a) 左右下顎骨の連合部であるので骨質も丈夫で、よくのこるのであろう。ただし、その最先端(i1 歯槽の上縁)までのこる標本は稀で、多くの標本はその部分を欠く。その割れ口は新しい面をみせていることが多いので、埋没時にはさらに骨体がつづいたものであったと考えられる。

b) 骨体が dm4 位までのこる標本。左右がほぼ同程度にのこる例は稀で、左右いずれか一方が dm4~M2

位までのこり、片側は犬歯部位で折れている標本が多い。その場合の割れ口には、新しいのと古いのがあり、埋存時にすでに左右のいずれかが、分離していた下顎骨もあったはずである。おそらく、強い力のために割れたものなのであろう。

c) ほとんど dm4 のみの部分の小片と、M1・M2 の歯槽ののこる標本など、大・小様々であるが、M2 の歯槽までのこる標本は少ない。恐らくこれは下顎枝の破損する際に、この部分に近接する M2 の歯槽部が破損し、原形を留めなくなっていることによるのであろう。

d) 下顎枝までのこす標本であるから、これはほぼ完存に近いものになるはずであるが、実際は左・右の揃うもの、連合部から連続してのこる標本はない。ただし、これについても修復の作業の進展によって接合資料の出来る可能性はある。

e) 下顎枝部の標本であるが、その折損部は大部分が下顎骨、筋、関節の突起部に近い部分である。これはその部分が薄い板状を呈しているために、折れ易くなっているからであらう。

これらの標本は、すべて同じ程度に火を受けており、灰白色に変色し、骨体に亀裂を生じていた。亀裂は歯槽上而から骨体の軸に直交するように生じているのが典型で、この亀裂は骨体を分断するように骨体の中央近くまでのび、かなりはっきりとした V 状のひび割れをつくる。おそらくこのひび割れが元で、下顎骨体がいくつかに分断されるのであろう。この骨体に対する縦方向のひびに対して、骨体に付して横位のひび割れもはいる。このひび割れは普通短かく切れ々に入るが、かなり長い場合もあって、骨体に長い裂け目が生じたり、それによって骨体が縦長に分断するようなことも生じている。これらのひび割れが下顎骨を小さく割るような結果になったのである。

歯槽

下顎骨には乳切歯から乳犬歯、乳臼歯、永久歯 M 1、M 2 までの歯槽が認められ、埋没する犬歯の他に、歯根を歯槽内にのこす例は少なくない。埋没時には、どの下顎骨にも歯が残っていたと思われる。このうち、犬歯については雌雄の判定に役立ち、乳臼歯、永久歯

の区別によって、年齢を推測する。

臼歯のうち、dm4(第4乳臼歯)は他の乳臼歯と異なって、前後に各2、その中間の頬側中央に1、計5本あくので他と区別することができる。M1はそれより前の乳歯と比べて一段と大きく、歯根は4本である。

dm4の次がM1で4本の歯根、その次がM2である。M2は完存する場合は、歯槽の開口なく、幅の狭い亀裂が見えるだけである。中に未萌出の臼歯がある。しかし、この部分で破損する標本が多いが、開口しない歯槽の形を部分的にも観取することができる。

雌雄の区別

雌雄の区別は未萌出の犬歯と犬歯歯槽の大きさ、形状等を観察あるいはX線を使って調べた。犬歯自体については、永久歯で未萌出歯が歯槽内にあるのを直接観察することのできた標本もあり、歯が脱落している場合には歯槽の大きさや形状で確認できた。こうして多くの標本の雌雄が確認されている。これができなかったのは、犬歯部分が失われた標本のみである。

イノシシの場合、雌雄の永久歯の犬歯はその大きさに大差があり、未萌出のごく小さい歯があっても、その差は明瞭である。不幸中の幸いなことであつたが、本標本はその殆んどが破損部をもつもので、特に犬歯付近の破損が多く、そこから犬歯の歯槽を観察できた。

雄の犬歯歯槽の幅は8.0~9.0mmが観察され、歯槽の下縁は下顎骨の骨壁すれすれのところまで広がる。従って、犬歯歯槽を直接観察できなくても、顎骨の髓腔を通してこうした形を観察することができる。また雄の下顎骨はこうした大型の犬歯歯槽をもつので、全体に体高が高くなる特徴をもつ。

雌の犬歯は4.0~5.0mmの歯槽幅で、かつこの程度の生育(M1萌出時)であると全高8.8mm位である。これは雄の20.0mmになるのと比べて半分である。従って、犬歯歯槽と下顎骨との間には歯髓腔が大きく開く、これもよく観察できる部分である。このように犬歯の小さいことから、下骨骨体は雄に比べて細目である。

集計

かなり破損の激しかった下顎骨標本から、その個数を算えるために、それらを下顎骨の部位別にすべて表中に示した。標本は左右の下顎骨が連合部で合わさ

った状態にあるものが多かったので、それを中心に調べ、さらに左右分隣し、かつ近心端(吻端)をのこすものをそれに加えた。

♂獣下顎骨集計

dm4M1<M2>*までの歯牙萌出で近心端をもつ

標本：39+5**

左右分離している標本でいずれか多い側10(右)

計 54

♀獣下顎骨集計

dm4M1<M2>での歯牙萌出で

近心端をもつ標本：49

左右分離している標本で、いずれか多い側：12

計 61

雄獣54、雌獣61、計115個体である。

B. 1才以上の下顎骨

既述した当才もしくは1才までの下顎骨を除くと、他は2~3才以上のものになる。歯冠部が欠損しているので詳細は不明であるが、どの顎骨もM3まで完全萌出していることは歯槽形成の状況からみても明らかである。M3の完全に萌出するのが3才以上とされているから、これらの標本はそれ以上の個体とみることが可能であろう。

大型の下顎骨がよくのこされ、下顎枝の破損を除けば、ほぼ全体がのこるという標本もあり、また左右の顎骨が、それぞれM2あるいはM3の位置までのこる標本もある。現在は下顎枝が破損するが、これらはおそらく完存する形で埋存していたのであろう。このような状況は先にのべた当イノシシの場合と同様ではなかったかと思う。ただ、大型の標本の方が逆に破損し易い状態となっていたことも考えられる。

雄獣

雄獣の下顎骨の方が修復される標本が多かったようである。骨が大きいのでやり易いこともあったと思う。しかし、下顎連合部などで接合できずに残されている標本がいくつもあり、それらが犬歯の歯槽部から折れているところを見ると、その部分の弱かったことがわかる。おそらく犬歯歯槽内に歯は当初から無かったのであろう。

*:<>は未萌出

**：やや成育の良い
恒体(萌出時は同じ)

b) 配石・石組内の焼骨

断片的なイノシシ、シカの多いなかで、2号石組のシカの中足骨は遠位部の破片であるが骨としての残りは最も良い。

c) 住居内での焼骨 (30号以外)

焼骨の出土は散在的である。しかし、17号住居でツキノワグマを得ている。

3. 30号住居址内の獣骨

一つの住居址内から大量の出土量を見たが、それらの大部分は鹿角であった。この鹿角片の修復に当たったが破損が著しく、思うように進めることができなかった。特に角幹部の破損が著しく、修復が困難であった。第一尖から角幹にのびる形を復原したが、大部分は片面のみのものである。これに接合できなかったが、鹿角分岐部の破片2個と角坐部分があるが、これが同一角であろうと思われる。この角の第一尖の基部現存径32.24×21.67mm、焼けて縮小していることを考えると、かなり大きな角である。角坐の下に角坐骨があるので、これは捕獲した個体のものである。

鹿角は他に、枝の部分の破片が5～6点あり、おそらく上述の角とは別の角があったと考えている。それも枝角の太さからかなり大きい角であったと思われる。なお、ここからは、鹿角以外にシカの距骨片一点が出土している。

4. ヒトの焼骨

ヒトの焼けた骨が1号配石の石棺状石組中より一括して出土している。しかし、その量はごく極られたもので、一部があるにすぎない。また、この場所で焼かれたわけではない。こうした骨の選別、搬入はどのように行われたのであろうか。

検出部位

頭骨

前頭骨、左右の頭頂骨の三つの大片があったが、接合できる。別図版に示したように冠状縫合と矢状縫合の接する部分で、前頭骨は右半分の一部がのこり、左右の頭頂骨は、頭頂に近い部分をのこすのみである。前頭、頭頂の各骨は強い火を受けてひび割れ、亀裂が

はいり、たわむ。別の場所で焼かれたはずであるから、この三つの骨は意識的に持って来たものであろう。

四肢骨

橈骨

左右が確認されたが、いずれも骨体部分をのこすのみのものであり、かつ、その亀裂、破損は著しかった。骨片は大部分接合したが、なお接合できない骨片がのこった。ただし、それらの破片も同一の個体の骨片とみてよいであろう。

寛骨片・坐骨

寛骨臼の一部と坐骨をほぼのこす。これにも破片が若干あるが、これに近い部位のものである。

大腿骨片

骨体の後面部分のみである。多少変形するが、橈骨程ではない。筋肉粗面と大腿骨稜がよく発達する。縄文人の形質をもつ骨である。

一括して採集された人骨はほぼ以上のものであって、他に骨片と称するものは殆んど無い。

5. 収束

以上金生遺跡の幾つかの遺構、地点で出土した焼骨について、それぞれの遺構・地点毎に説明してきた。それらは各節内において、動物種の内容、量差等について詳しくのべておいた。それらを今要約すると以下のようなになる。

1. 8号土壌中の焼獣骨

最も多量に出土したもので、その在り方もまた特徴的であった。

① イノシシの下顎骨の総数は断片は別にして176個に達した。それらを個体数とすると138個体となる。そのうち115個は永久歯M1の萌出する段階のもので、当才、その死亡推定季節は秋である。これには雄・雌ともに含まれた。

その他の下顎骨はM3が萌出した段階のみのものであって3才以上、これにも雄・雌の両性のものが含まれた。

これらの下顎骨に穿孔その他の特別の加工はみられず、おそらくすべて完全な形で当初はあったのではないと思われる。ただし、既にのべたが、成獣雄の犬

歯のみは全て抜去されていたと思われる。雌の犬歯はそのままである。

②特定の骨を選んで一定場所で焼くか、或いは焼かれた骨を埋納する例は、縄文あるいはそれ以降を通じて知られていない。本例は真に特殊な例である。しかし、こうした例は今後必ずや他にも検出されることと思われ、その際には、今回不確実であった埋納の状況のより完全な把握に務めなければならないであろう。

③焼骨の意義

動物の捕獲を祈念して、その一部を保存、保持する習俗は、古今、世界に共通する。イノシシの場合、その大型の犬歯、下顎骨はそれをするのに最も容易である。しかし、普通そうした骨や歯は大切に扱われ、傷つけることをいみきらう。それは、その動物を傷つき痛めることにつながるからである。まして、火中に入れたり、落したりすることは避けられるべきことであつたと思う。

それが、火中で焼かれるということは、動物に対する信仰と火に対する信仰とが相い合体し、さらに次元を高めた縄文人の世界観なり宇宙観を、火と積石という祭壇によって演出しようとした意図があつたからなのであろう。従って、今日知られる狩猟民社会のそれとはかなり異なる様相があつたのではなかろうか。これが日本列島の特殊な自然環境の中で育つたものなのであろう。

火が縄文人の中でどのような意義をもつものであつたか知り難いが、これを若し自然の中でみるとすると火は一切を焼きつくすと同時に、そこから新たな木々の芽生える新生の大地の始まりをもたらしものでもある。そして、イノシシは、シカよりも多くの仔を育む、豊かさの象徴ではなかつたかと思う。特に当才獣はその数も多く、捕獲する機会も多かつたに違いない。そして稀に捕れる大型成獣も含めて、その豊かなことを願うとき、火とイノシシは容易に結びつき、祈りの場で欠かせないものとなつたのであろう。

石組・住居内の焼獣骨

①石組・住居内の焼獣骨は上述の土壌のものと異なり、イノシシとシカの四肢骨と頭骨を主とするもので

あつた。そして、下顎骨は若獣(当才)と成獣が各1点あつたに留まつた。

若し、この石組・住居内の焼獣骨が上述のピットのものと同時期とすれば、下顎骨の大部分はそのピット内で処理され、他の部位が別の場所で処理されたことになる。その別の場所がここであつたのかも知れない。

②ここでは、イノシシとシカの全身骨が対象となつていて、先に述べた歯牙の場合とはまた意味合いが変ることが予想される。つまり、ここではイノシシ、シカその他の獣も含めた獣全体に対する呪術的な焼骨の行為があつたことになる。この場合の焼骨は金生遺跡に限らず縄文遺跡において広くみられるもので、特に中部地方以東に知られることは各地の報告にみる通りである。おそらくこの場合にも、基本的には先に述べた獣を育む森林と、それを育てる大地の新生を司る火の役割が呪術的な行為の元で一体化していった過程を、この焼骨は示すのではないと思われる。前者イノシシの下顎骨を扱うのが主の場であるとすれば、その他の場合は副の場であることになろう。

③クマとカモシカについて

クマとカモシカの焼骨が僅かであるが出土した。このことはこの地域の狩猟の対象にクマとカモシカの確かな例を加え得たことで意義があつたと思っている。焼骨中からクマやカモシカを検出できる例は決して多くない。特に平地部の例では殆んどみることができない。しかし、八ヶ岳の山々をのぞむこの地域であれば、クマやカモシカが捕獲されることはあつたはずである。ただ、それにしてもあまりに僅かな断片的な破片である。この点については、特にクマにみる骨の扱い方が注意される。それはクマの四肢骨が指趾骨に至るまで種々の加工が行われ、交易の品として平野帯に運ばれているのである。平野部の遺跡で知られるクマの犬歯穿孔品や骨の加工品との関係でみなければならぬであろう。

④焼人骨の検出

焼けた骨の中で注目されるのは人骨の焼けた部位があつたことである。その数は極めて少ないのであるが、頭蓋、骨盤、下肢と骨の揃っているところをみると同一個体の可能性があると考えられるのである。ただ

一個体にしては余りに骨が少ない。骨の焼かれた場所が別にあって、そこから骨の一部が選ばれここに埋められたのであろう。人は頭蓋と四肢が一つの組合せとなって埋納されている点、イノシシその他の獣骨とは異なる。人の場合は、あくまで一個の人間が考えられていたと思われる。しかし、究極的には豊かな自然の中の生物として動物たちと同じ役割を荷負うものであったのであろう。

参考文献（紙幅の都合で1980年以後のものに限った）

宮崎重雄：群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内1号住居跡の獣骨『千網谷戸遺跡調査報告1973』1980

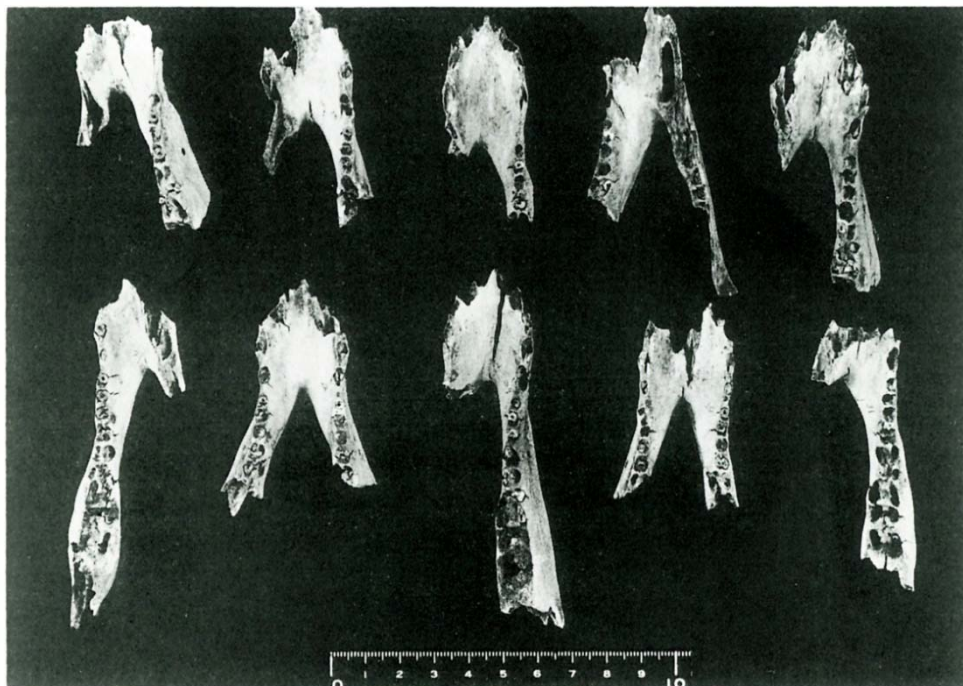
金子浩昌：第三次調査出土の獣骨について、田部井功編『後谷遺跡』桶川市文化財調査報告嘗第14集、1982

金子浩昌：動物遺存体『なすな原遺跡第1地区』1984

新津 健：縄文時代後晩期における焼けた獣骨について『日本史の黎明』六興出版、1985

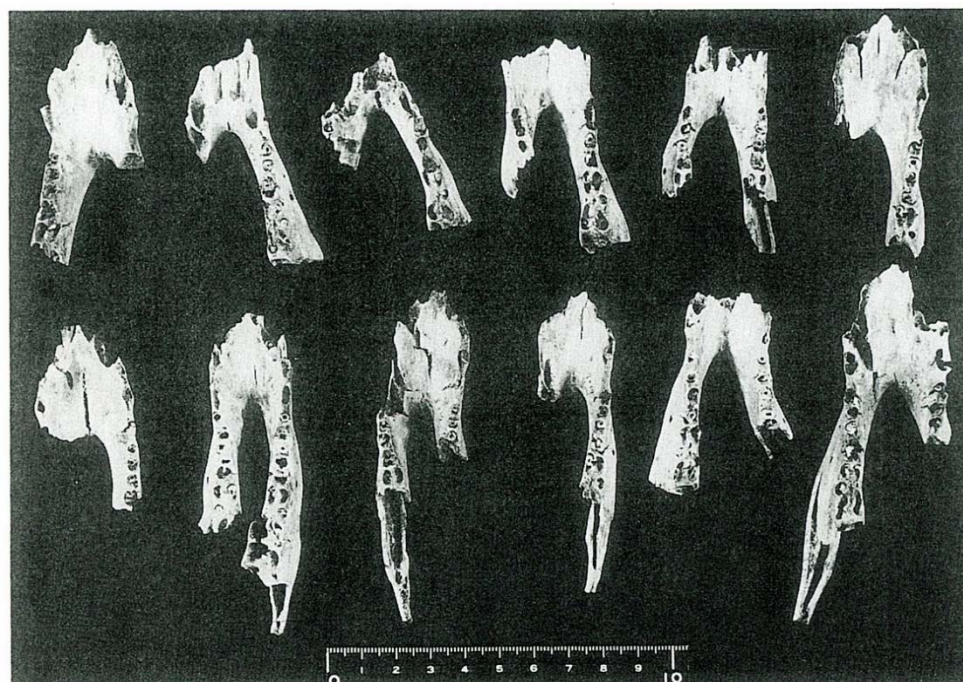
金子浩昌：正網遺跡出土の獣骨と骨の加工品、鈴木加津子・鈴木正博・荒井幹夫『正網遺跡一荒川右岸における縄文式後晩期遺跡の研究一、所収、富士見市造跡調査会研究紀要、No.5、1989

この標本については、イノシシ飼養の資料として述べられていることがある。しかし、当才兎を主体としているなど、年齢の個体が片寄り、飼養の説明にはそ



①上

雄 イノシシ下顎骨 咬合面
(dm₄・M₁萌出段階)



①下

雌 イノシシ下顎骨 咬合面
(dm₄・M₁萌出段階)

ぐわなことが気になる。飼養といった問題を論ずるには、各地イノシシ骨の出土例についてのいねいな観察、考察が必要と考える。

長野県上高井郡高山村 湯倉洞穴 クマ・カモシカ・サル

クマ・カモシカ・サルが洞穴にまともられています。カモシカの中手、中足骨は折られていません。しかし、クマの大腿骨は割っています。骨はこの場所にまともておいたのでしょうか。狭い洞内ですが、そうした場所があり、頭は別であったのでしょうか。

洞穴の壁ぎわです。骨を置いたところは、踏みつけたりはしないのでしょうか。その扱い方がわかります。

中手、中足骨では指骨部分が写っていません。外れたのかも知れません。筋を利用するためか。

貝塚の獣骨の知識—人と動物のかかわり—考古学シリーズ 口絵写真より 金子浩昌著



ツキノワグマ・カモシカ・ニホンザルの顎骨や四肢骨出土状況(長野県上高井戸郡高山村湯倉洞穴) 縄文後期の包含層出土の獣骨群です。①中央にクマの肩甲骨、②ツキノワグマの大腿骨③ツキノワグマの上腕骨④カモシカ中手骨⑤カモシカ中足骨⑥ニホンザル下顎骨が見えます。

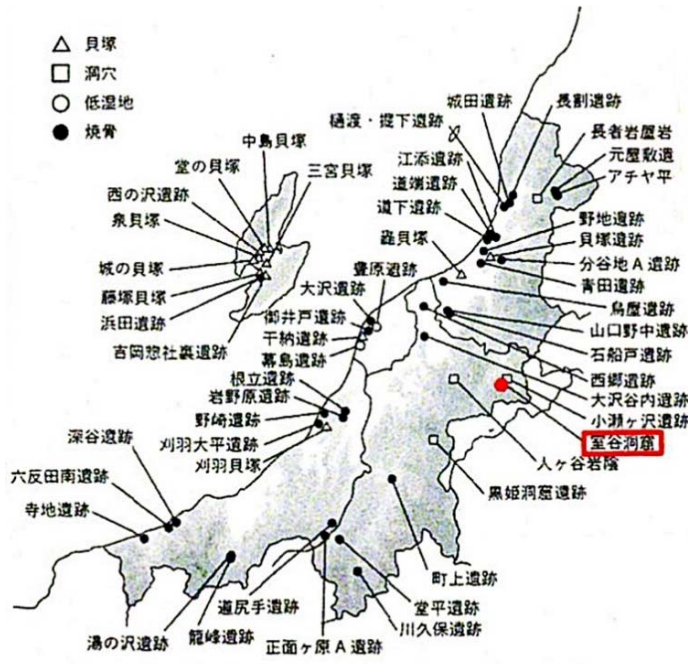
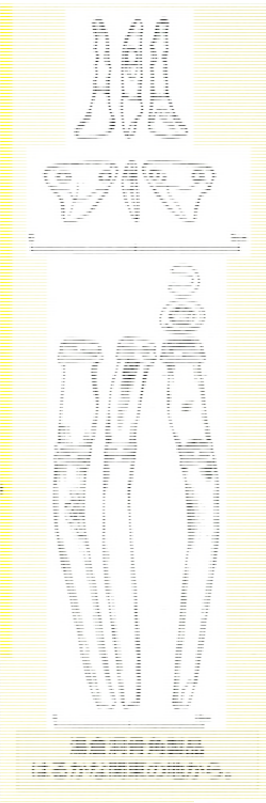


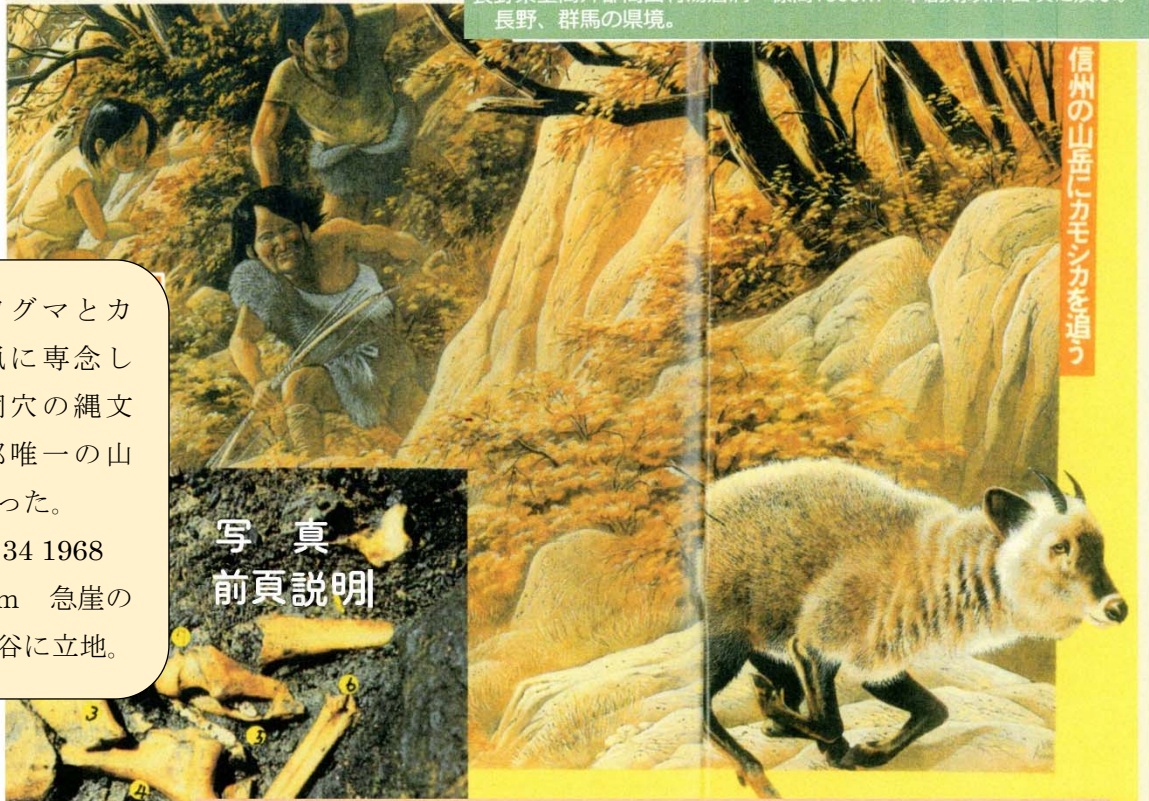
図 7-1 新潟県域における動物遺存体の出土遺跡（縄文時代）

室谷洞窟はカモシカとツキノワグマを主とする唯一の洞穴遺跡ですが、動物遺体については未刊です。

私がずっと昔、書いたものです。こんな表示は恥ずかしいのですが、手元に遺物がなく、また誰も調べる人もなく今日に至っています。

湯倉洞/室谷洞

新潟県東蒲郡上川村室谷洞穴 標高250m 草創期～早期
カモシカ(早期23個体)ツキノワグマ(同25個体)主体。
長野県上高井郡高山村湯倉洞 標高1500m 草創期以降古墳に及ぶ。
長野、群馬の県境。



ツキノワグマとカモシカ猟に専念した室谷洞穴の縄文人は本邦唯一の山岳猟人だった。

上代文化 34 1968
標高 250m 急崖の続く深い谷に立地。

写真 前頁説明

クマ、カモシカ、サルの骨が重なるように出土するなんて、洞穴の遺跡でも珍しいし、貝塚では絶対にみられません。

私は夢中でカメラのシャッターを押しました。

湯倉遺跡の現場に行く途中で、カモシカに出会うことがあったのです。さすがと思いました。道の真中にぼつんと立っているのです。

室谷洞窟の動物遺存体 昭和39年1964年 「室谷洞窟の動物遺存体 上代文化 第31輯 641209」

昭和36年(1961)新潟県長岡市に在住されていた中村孝三郎氏から室谷洞窟調査への参加要請を受け、その年の夏現地に入り洞穴内から出土する動物遺骸の状況を観察する機会をもった。

このとき新潟大学の小片保先生と知り合い帰途新潟に立ち寄った。そして先生のお宅に一泊した。私が発掘した人骨を先生が調査されるようになったのもこのときの縁からである。

昭和37年(1962)1月に長岡を訪れた。断片的なデータのとれる骨を区別し、種別部位別するので調査期間は終わり、後は東京で詳細調査をする事となった。

室谷洞窟の動物遺体の調査は、私にとって本格的な洞穴遺跡動物についての最初の経験であった。そして、またこれだけまとまった遺物の調査が積極的に行われたのも最初ではなかったかと思われる。調査の結果、この洞穴の主体となった獣がカモシカとツキノワグマであることがわかった。この動物については、これまでに洞穴遺跡では知られていたものの、普通はあくまでもニホンジカもしくはイノシシが主体で、これにカモシカ、ツキノワグマの遺骸が混在するというものであった。しかし、ここでは完全にこの二種が大型獣類の主体となっていることが、特に洞穴の下層においてみられたのである。当然このことは室谷洞窟をとり囲む地形的な環境と深く関わることであって、標高こそ250mであるが、急崖をなす山容と深い谷は、カモシカやクマの生息にもっとも適した環境であったのであろう。

室谷洞窟の動物遺体調査と前後して、日本考古学協会の洞穴遺跡特別調査委員会による洞穴の調査資料及びその他各地に行われた洞穴遺跡において出土した動物遺体を広くみる機会をもった。しかし、この室谷洞窟と同じ動物相をもつ例を他にみることはできなかった。室谷洞窟をとりまく環境はかなり特殊

動物種名	堆積各層									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
《軟体動物 Mollusca》										
腹足類 Gastropoda										
1. アワビ Haliotis sp.		*								
2. カワニナ Semisulcospira bensoni (Philippi)		*	*							
斧足類 Pelecypoda										
1. ヤマトシジミ Corbicula japonica Prime		**	**							
2. スマガイ Anodonta laute v. Martens			*	*						
3. イシガイ Unio douglasiae nipponensis v. Martens			*	*						
陸産貝類										
1. ナミギセル Stereophaedusa japonica (Crosse)		*	*	*	*					
2. マイマイ類 Euhadra sp.			*							
《節足動物 Arthropoda》										
甲殻類 Crustacea										
モクスガニ? Eriocheir japonicus de Haan				*						
《脊椎動物 Vertebrata》										
両棲類 Amphibia										
ヒキガエル Bufo sp.			*		*	*				
鳥類 Aves										
キジ Phasianus sp.			**	***		*		*		
カモ Anas sp.				**						
哺乳類 Mammalia										
1. ニホンジカ Cervus nippon nippon Temminck			**	*	*					
2. カモシカ Capricornis crispus crispus Temminck	***	***	***	***	***	*	*	*	*	*
3. イノシシ Sus scrofa leucomystax Temminck			*	*						
4. アナグマ Meles meles anakuma Temminck			***	***	**	*				
5. テン Martes melampus melampus Wagner			**	***	*					
6. イタチ Mustela sibirica itatsi Temminck	*		*		*					
7. ツキノワグマ Ursus thibetanus japonicus Schlegel	****	**	****	****	****	*				
8. キツネ Vulpes vulpes japonica Gray			*							
9. タヌキ Nyctereutes procyonoides viverrinus Temminck			**	***	*					
10. ノウサギ Lepus brachyurus brachyurus Temminck		*	*****	*****	*****	*			*	*
11. ニッコウムササビ Petaurista leucogenys nikkonis Thomas			**	***						
12. ニホンザル Macaca fuscata fuscata Blyth		*	*	*						

註記 * : 断片的なものでも出土例があればこの記号を付けた
 ** : 哺乳類の場合、顎骨の出土例があればこの記号を付けた
 *** : 顎骨・四肢骨等比較的多し、鳥骨等は上腕骨等による。
 **** : いずれも出土例極めて多い場合に付ける。
 以上のような目安で出土量を表示したが、もちろん記号は便宜的なものにすぎない。

図12 室谷洞窟出土動物遺存体

なものであったのである。そして、これこそ山岳狩猟者たちの生活環境ではないかと考えたのである。ところでこの山岳狩猟者たちの生活文化の特殊性を指摘することは可能であるが、これと同じ性格の遺跡が現在までに知られていないとなると、動物相に対する考えを今少し幅を広げ、カモシカ、クマとシカ、イノシシなどの混在の仕方に注意して、幾つかのタイプ分けができるのではないかと考えている。例えば昭和46年(1972)以降発掘調査が行われてきた長野県高山村湯倉洞窟にみる高地性洞穴、室谷洞窟の峡谷山地性、高原性立地などに分けるのである。これについては、別の機会に詳しく述べたいと思う。

南海のジュゴンと蝶形骨器

新石器時代に入り、沖縄では、蝶形骨器がジュゴンと共にこつ然と現れる。沖縄の島とイノー(礁湖)の贈り物である。沖縄の縄文人は、蝶の美しさを歌い、その思いを刻みました。ていねいに蝶の形を写したのです。縄文文化の中で、蝶の姿を写した製品は他にありません。

その考古学的研究は島袋春美氏によって復元され、体系付けられました。私は文様の中に昆虫としての羽の文様が生かされていることを少し付け加えました。

縄文人は丈夫なジュゴンの骨を素材として蝶の形をつくりました。胴と前羽、後羽を組み合わせ、それに文様を刻みました。羽には孔をあけて紐を通しつなげたのです。ただ現在では長い年月の間に破損しました

が、それをていねいに復元して、往時の姿に戻したのです。中にはあることが予想されても、見付けることの出来ない部品もあります。それは予想してみると云うことも大切です。縄文人は、全体を考えてつくっていた筈です。自然の蝶を見てつくっていた筈ですから、不自然な蝶をつくる筈がありません。

私たちは考古学的な研究を生かして幾千年か前の姿を復元したいと考えています。

蝶形骨器を素材であるジュゴンの肩甲骨に割り付けた推定図、肩甲骨の形状と製作されている骨器の形状と一致する部分から推定しています。当然、どの製品についてもこのような素材の推定図をつくるのが出来るのです。

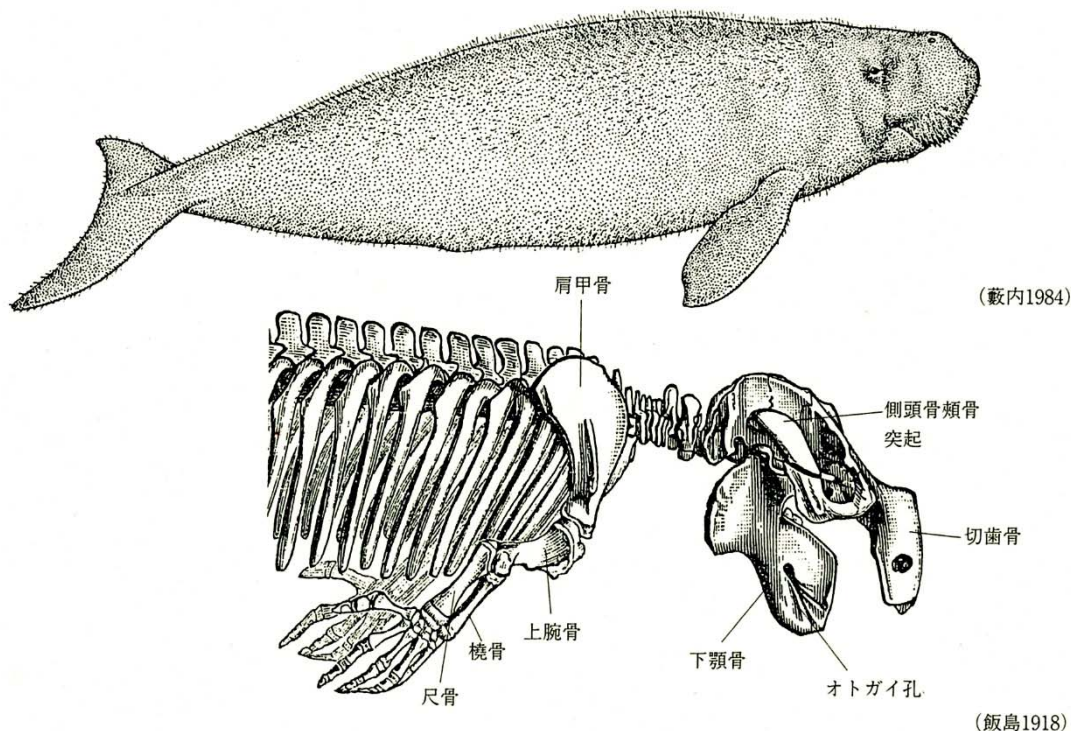
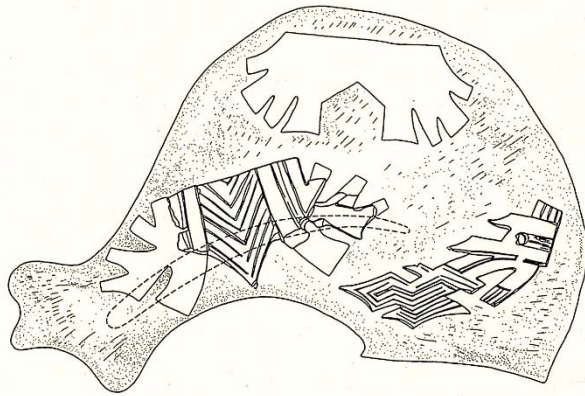


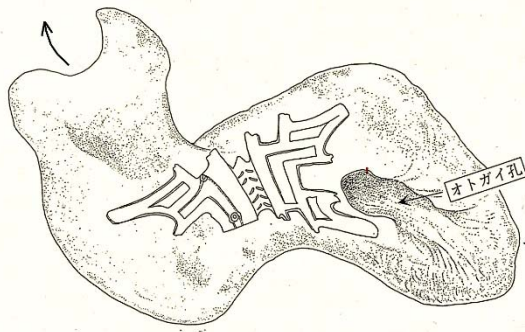
図9 ジュゴン生態図および骨格図(骨格図は一部のみ) ジュゴン体長:2.5~3.2m

ジュゴンは沖縄の人々にとってチョウと同じニライカナイ(楽土)の使者として尊ばれていたが、食物として珍重される風が強まり乱獲されるようになった。今改めてジュゴンのことを考えるとき、今日、沖縄近海に生息するジュゴンは「たった三頭」という現状がある。沖縄の海がジュゴンの生息を脅かすことのない豊かな自然の海に戻ることを心から願うものである。



1. ジュゴン右肩甲骨利用例 吹出原遺跡出土品より(金子1999)

中央上:幼体の後羽で、推定した形。
図 11 参照

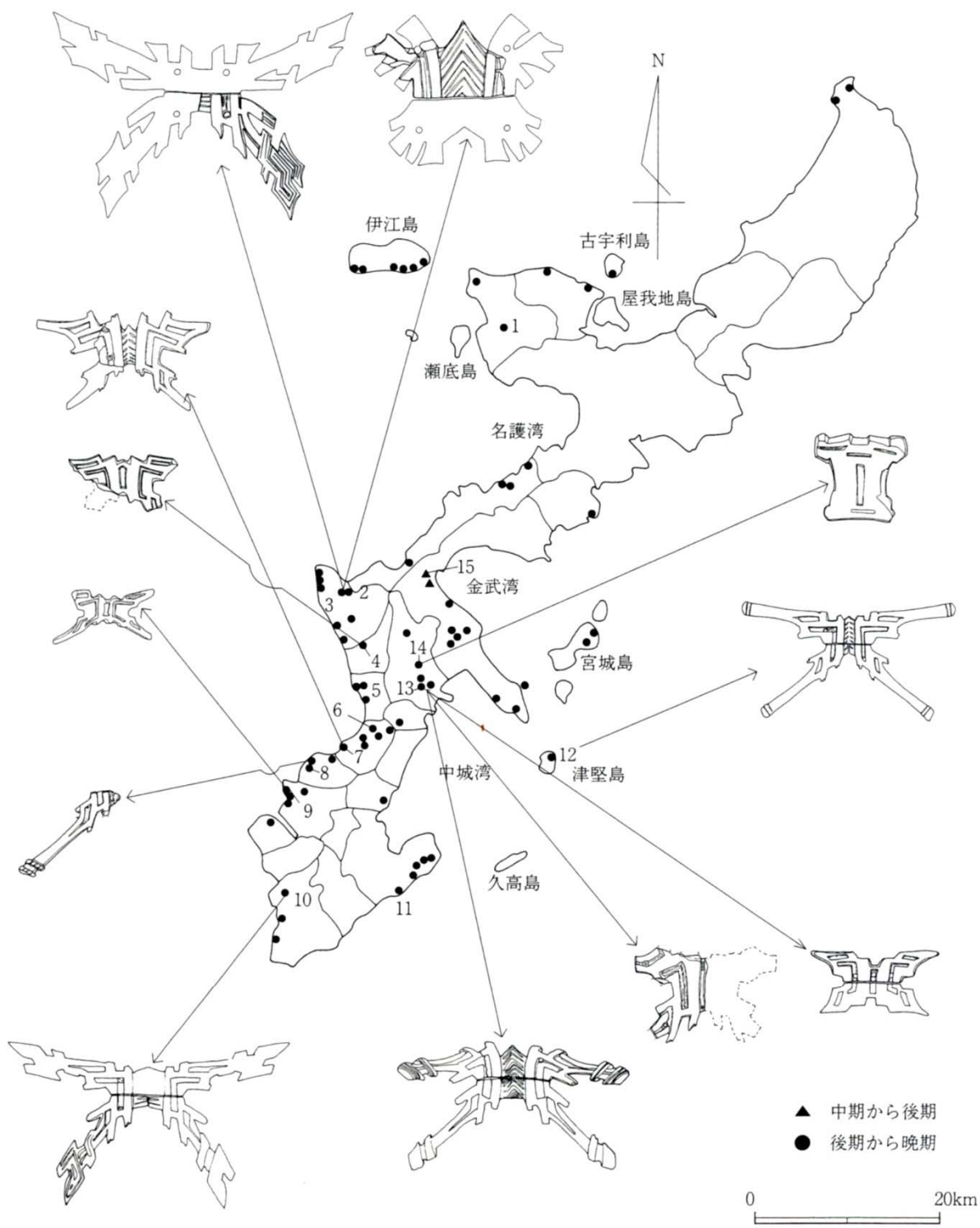


2. ジュゴン右下顎骨利用例 真志喜安座間原第1遺跡出土品より(金子2000)

このオトガイ孔にひもを横に通して、垂げたと考える。

	中期	後期	晩期	
	古我地原式期	荻堂式期	荻堂式期から室川式期	室川式期から宇佐浜式期
結合式		<p>2</p>	<p>4</p>	<p>5</p>
		<p>3</p>		<p>6</p>
単一式	<p>1</p>	<p>7</p>	<p>11</p>	
		<p>8</p>		
		<p>10</p>		
		<p>9</p>		

図 11 蝶形骨製品の変遷



- | | | |
|-------------|----------------|------------|
| 1. 屋比久原遺跡 | 6. 喜友名山川第5遺跡 | 11. 百名第2貝塚 |
| 2. 長浜貝塚 | 7. 真志喜安座間原第1遺跡 | 12. キガ浜貝塚 |
| 3. 吹出原遺跡 | 8. 城間古墓群 | 13. 室川貝塚 |
| 4. 嘉手納貝塚 | 9. 崎樋川貝塚 | 14. 八重島貝塚 |
| 5. クマヤー洞穴遺跡 | 10. 兼城貝塚 | 15. 古我地原貝塚 |

図3 沖縄縄文時代の蝶形製品出土遺跡分布図

岩手県一関市花泉町貝鳥貝塚にみる骨角器文化(縄文後期中葉から晩期)

縄文人と動物たちとの関わりを骨角器にみます。

—岩手県最北の淡水貝塚、しかし山を越え海にも活躍の場をひろげた縄文人です。—1969年調査の成果より

1956年千葉県館山市郊外の鉾切洞穴の調査と報告を終えた私は、機会あってこの内陸奥深くにある貝塚の調査となった。しかし、北上川流域周辺の遺跡には関心を持ち踏査をしていました。

一関市 貝鳥貝塚の骨角器類



左より

- ・オオカミの彫刻付角棒全長 43.5 cm(晩)
- ・カエル彫刻高さ 4 cm鹿角製(後末)
- ・アオザメ歯
- ・ツキノワグマ下顎左犬歯
- ・オオカミ下顎左犬歯
- ・オオカミ左下顎骨(後の頁に垂下法の推定図)
- ・オオカミ左脛骨遠位端(穿孔に注目)

下段-左より

- ・銚頭(燕形)
 - ・以下刺突具各種
- いずれも晩期

「古代史発掘」の図版です。

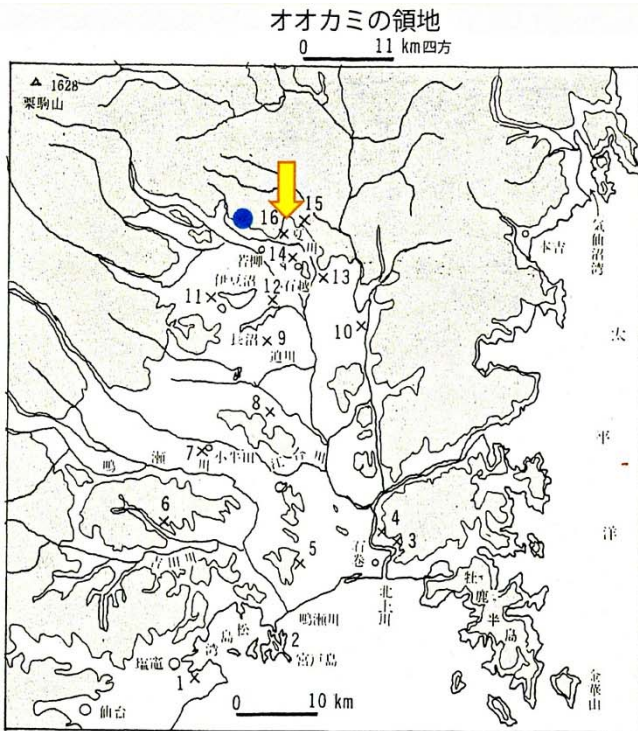


図2 仙台平野における主要貝塚の分布図

- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| 1. 塩釜市大木根貝塚 | 7. 不動堂町素山貝塚 | 13. 石越町神明下貝塚 |
| 2. " 宮戸島貝塚 | 8. 涌谷町長根貝塚 | 14. " 富崎貝塚 |
| 3. 石巻市沼津貝塚 | 9. 南方町青島貝塚 | 15. 花泉町白浜貝塚 |
| 4. " 南境貝塚 | 10. 中田町浅部貝塚 | 16. " 貝鳥貝塚 |
| 5. 矢本町平田原貝塚 | 11. 築館町嘉倉貝塚 | |
| 6. 大松沢村大松沢貝塚 | 12. 迫町糠塚貝塚 | |

一関市 貝鳥貝塚

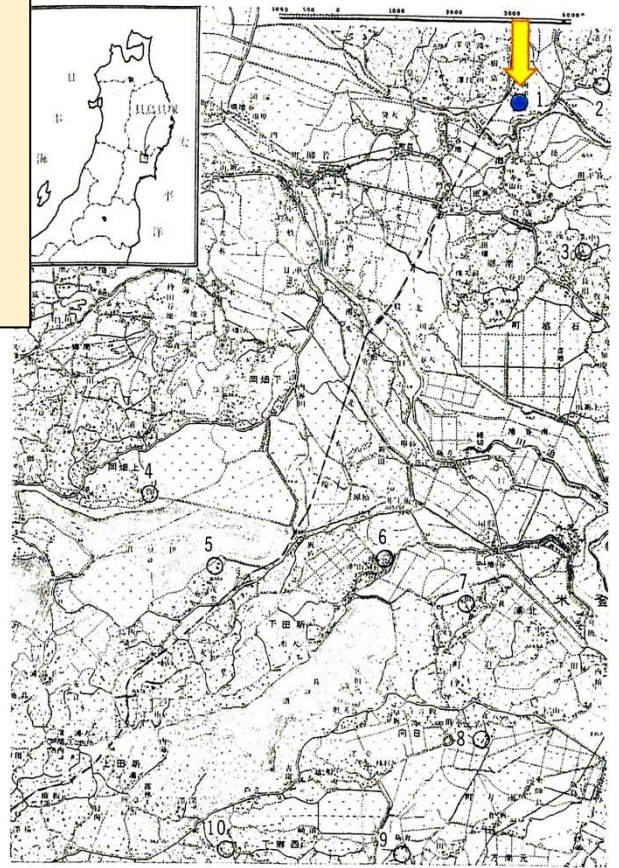
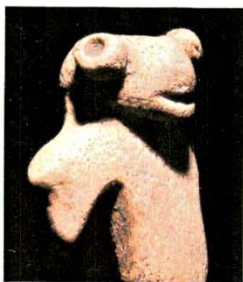
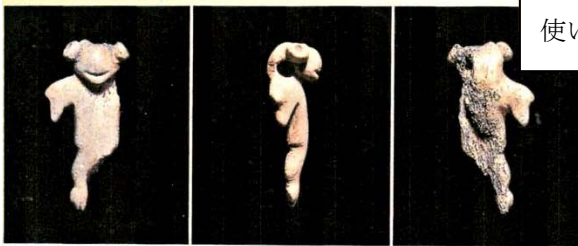


図1 貝鳥貝塚付近の地図(五万分の一地形図による)

- | | | | | |
|----------|--------|--------|--------|---------|
| ● 1 貝鳥貝塚 | 2 白浜貝塚 | 3 富崎貝塚 | 4 敷味貝塚 | 5 唐木崎貝塚 |
| 6 糠塚貝塚 | 7 地蔵貝塚 | 8 八森貝塚 | 9 青島貝塚 | 10 平貝塚 |

カエル像

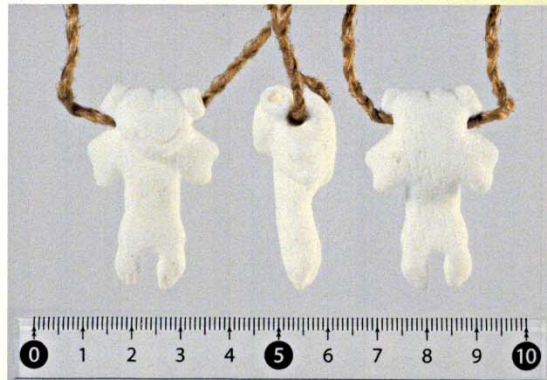


カエルを表現した彫像：40.2mm・鹿角製・縄文時代晩期・貝鳥貝塚

カエル像は、貝鳥貝塚を囲む自然の表徴とも云える作品です。カエルの表現をしていますが人物像の表現です。つまりカエルも同じ仲間です。一つの自然の下で。

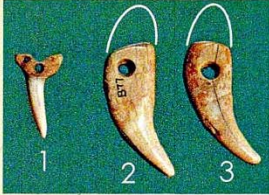
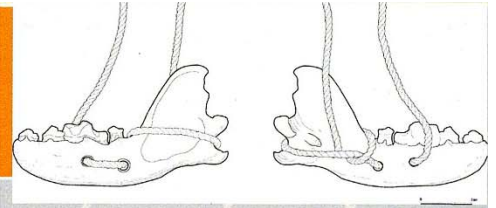
ですから誰の首にも下げられるように孔があいています。キョトンとした顔つきで「同じ仲間さ」と云いたげです。

数ある動物像の中で、唯一のもの、垂飾の加工のある点は、利用、使い方を示します。とても重要です。



岩手県一関市花泉・貝鳥貝塚

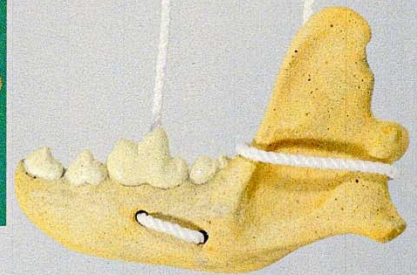
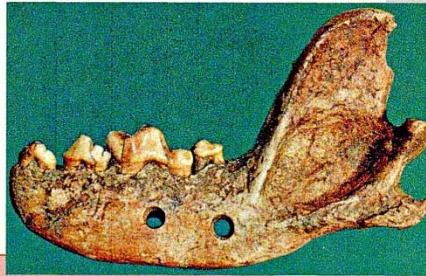
縄文人の湖沼、山、そして海に広がる漁・猟の活動
 - その多彩な文化をみます -



- 1.アオザメ 南日本産、鋭い歯が特徴
- 2.3オオカミ犬歯
- 2はツキノワグマ。歯根部を丸く削る。

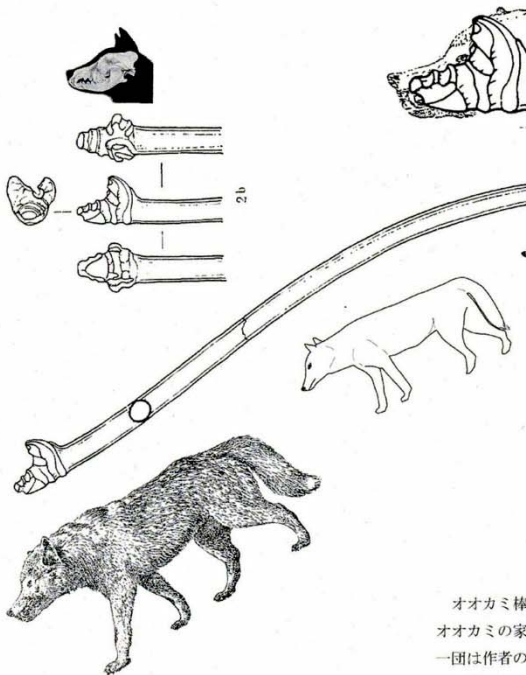
犬歯の元を削っているのは、バランスよく下げられることを考えているのです。孔を安全に穿孔出来ることを考えています。

この下顎骨をみた縄文人は、遙かに見たオオカミを思い浮かべました。押し頂き、胸に下げ、山が豊かでありませう祈りました。大きく立派な元の部分を残し、先の部分は犬歯を外すために切り取り、中心に孔を開け紐を通して吊します。紐の片側を下顎枝に巻けば綺麗に吊すことができます。



この骨は縦に二孔が並んでいます。筒型だから横に開けた方が簡単なのに。縄文人はこの骨がオオカミの脛骨であること、それなら縦にしなくては何と云うことを知っていたのです。おそらく下の孔を通して、上の孔から裏に入れて結べば縦位置にしっかり止まります。縄文人は大したものです。

オオカミの彫刻付き鹿角棒



オオカミ：1/6
 オオカミ棒：2/1

何匹かのオオカミが行くのを遙かにみた。一直線になる様に並んで。

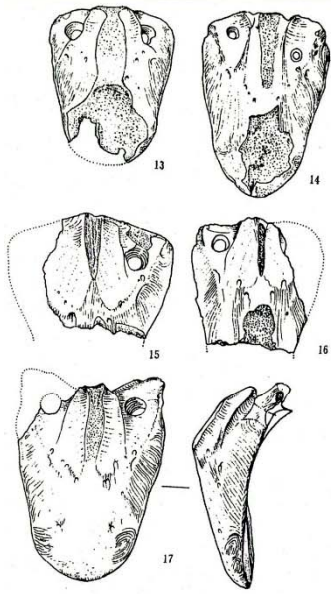
オオカミ棒に彫られたオオカミは1/12のホンデオオカミとほぼ同大です。後ろにオオカミの家族の一団がつづきます。ホンデオオカミの体長は1.2m。つづく家族の一団は作者のイメージです。

左端のオオカミ図は今泉吉典先生の著書から引用しました。口元や耳の大きさから、縄文人が鹿角に彫刻したオオカミのサイズが思い浮かびます。

(今泉吉典『日本哺乳動物図説』昭和25年)

体長60cmになる大鯛(マダイ)の前頭骨の穿孔垂飾品

湾最奥淡水域でマダイの垂飾品の出土した唯一の例。丁寧に加工しています。どのようにして手に入れたのでしょうか。貝鳥貝塚縄文人の広くて鋭い観察力に驚くのです。

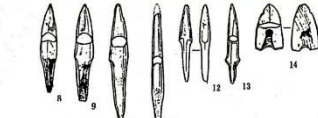


マダイ前頭骨穿孔品

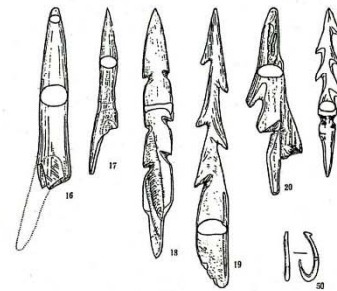
村からは、はるかに遠い海でみたマダイの美しく力強い姿を何とか見せたいと思いました。仙台湾側の村人には考え及ばないことでした。



マダイ頭骨格図(写真)



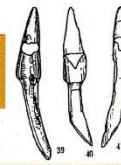
骨角・牙鏃



燕形鈎・刺突具

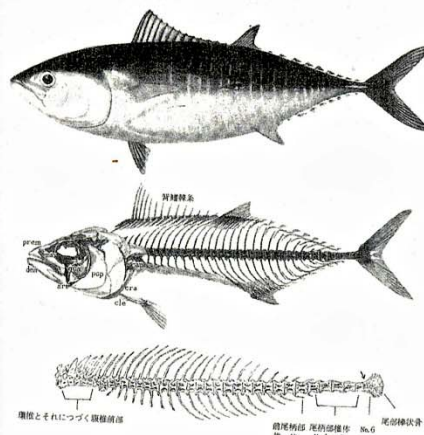
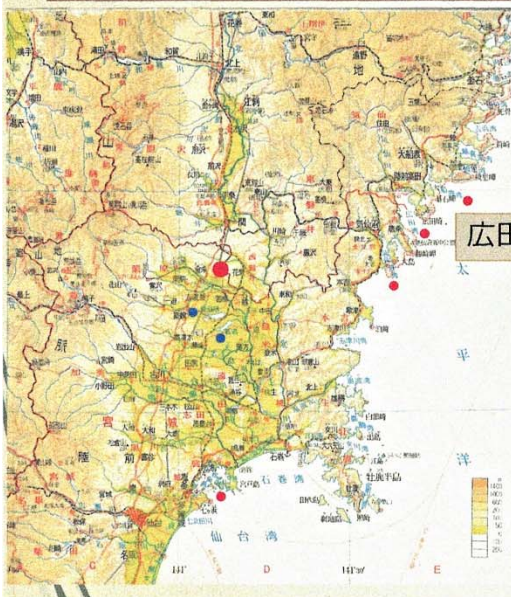
釣針

有尾形刺突具

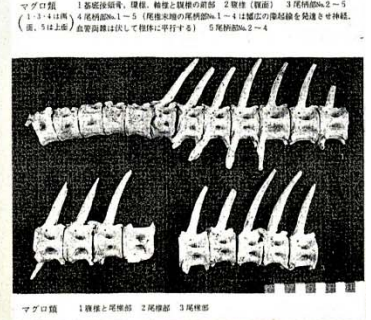
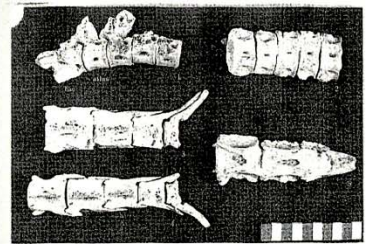


狩猟具と一緒に、漁労に使った骨角器がたくさん出土しました。

縄文時代 魚、猟の拠点 三陸・仙台湾岸域そして仙台平野が広がります。縄文中～後期、宮城県広田湾でのマグロ漁(陸前高田市大洋台貝塚) この調査は三陸沖地震の災害で亡くなられた私の友人と共同の仕事でした。おそらく本邦初の詳細調査です。ご冥福をお祈りします。



マグロの外観(上)、骨格(中)、と脊椎(下)
 prem: 前上頷骨
 max: 上頷骨
 dea: 歯骨
 art: 関節骨
 qua: 方骨
 scap: 肩胛骨
 cer: 鱗口骨
 cbc: 鰓蓋骨



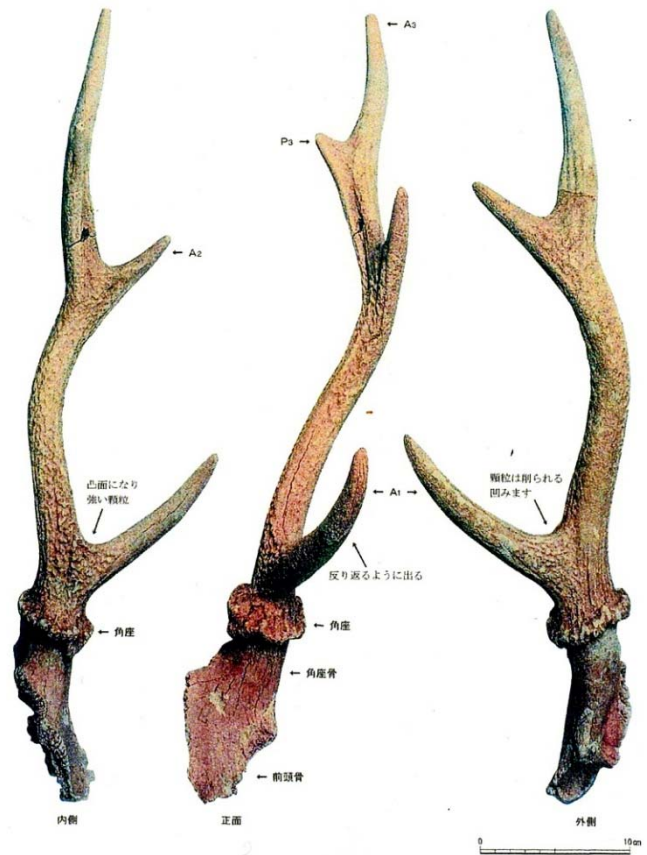
骨角器—I

「鹿角」を題材として、縄文人のつくった道具の一つ「銚頭」について述べてみます。シカとのつながりの強い一面でしょう。

ニホンジカ左側枝角

ていねいに角を見ていた筈です。

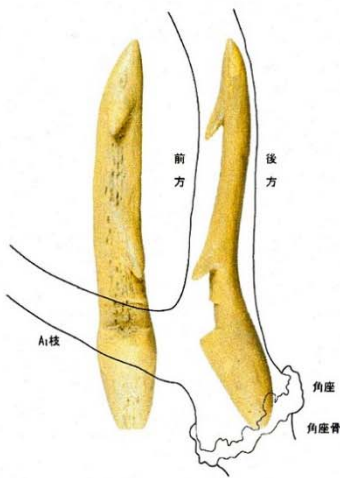
ニホンジカ左側角



横浜市

称名寺貝塚出土の銚頭にみる鹿角の利用法

A貝塚



B貝塚



L左角
外側後面に2溝をみる。それがみえている。一印

後期初頭の単純銚頭の発達

骨角器論—Ⅱ

僅かな骨角器の出土例です。でも、縄文人の気持、生活環境をよく現した製品です。オオヤマネコの尺骨を、何とみごとに使ったことか。縄文人の面目躍如たるものがあります。(考古学ジャーナル 694・2017 より)

単独で使われた骨角製品とセットとしてみる骨角製品。いずれ使われる場合には、単独で使われたのであろうが、一つの遺跡から出土品としてみると、セットとしての意義もある。

千葉県富津市富士見台貝塚の動物遺体と骨製品

縄文後期中葉、漁撈活動の新たな展開の様相を東京湾口部東岸の貝塚にみる。

後期初頭東京湾口部東岸の洞穴(館山市鉦切洞)に、外洋を目指した人たちの小さな拠点があったが、中葉期加曽利 B2 式期の貝塚が、北寄り富津市富士見台で知られた。小さな入江にあった。ここで知られた鹿角製の銚頭や釣針、ヤス状刺突具類は、上述の鉦切洞の製品に伝統を引きながら、形態的には大きく変わり、新しい工夫が試みられた。

この貝塚の主体種はスガイ 60%で、食料の資源の有効に欠けたが、房総丘陵が背後にあり、シカ、イノシシが積極的に行われ、獣骨の出土は多く、漁撈も積極的であったことは、漁具類の多彩であることからわかる。

さらに装身具類にもその様相をみる(図 2)。小貝塚であるが、オオカミ犬歯 1点(2)があった。最大のウミガメであるオサカメ肢骨の穿孔品 2点(3)、巧みに潜水して魚を捕らえるウミウの大腿骨穿孔品(1)はこの地に生活した人々の積極的な漁猟の活動とともに、自然への畏敬の思いから作られた製品である。

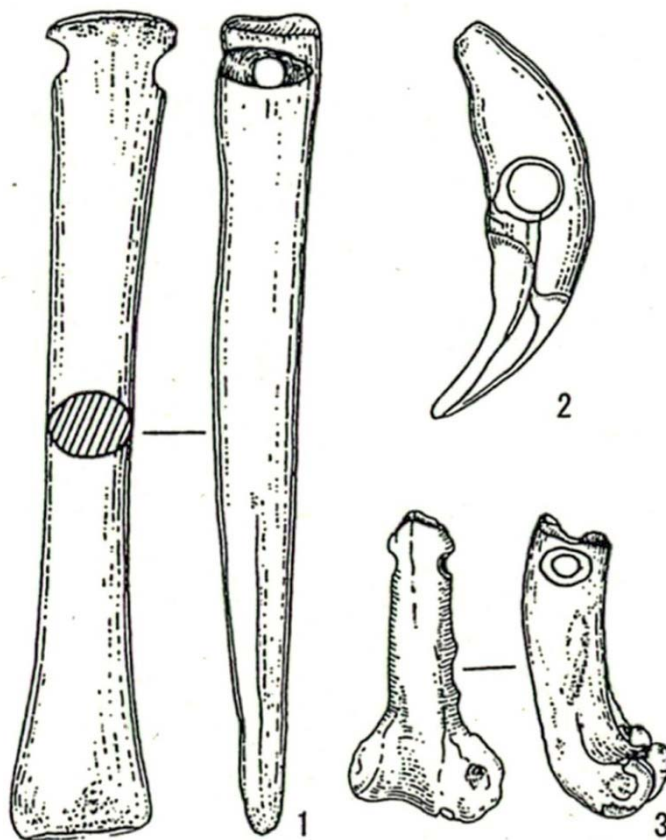


図2 千葉県富津市富士見台貝塚の骨牙製品
左端全長10.9cm

千葉県立富津海洋資料館報告 富士見台貝塚
縄文文化後期漁撈と骨角器文化の一型 1964 千葉県教育委員会

2. オオヤマネコの垂飾品とその素材

西ヶ原の縄文人が、この骨を手にしたときその形がイヌやタヌキとは違うことに気づいたと思う。真っ直ぐにのびる幅広い骨体と深く切り込む近位の関節部分の形が特徴的である。ただ、この動物（オオヤマネコ）についてどの程度の知識をもっていたかは不明であるが、骨の利用に関心をもっていた縄人はこれを素材として身につけたいと思ったのではなかろうか。そして直ぐに思いついたのが鉤形に曲がる勾玉状の垂飾品(図1)であった。石製とはまた違う稀少性、複雑な形に縄文人は心引かれたのではないか。朱彩していっそう目立たせたのも、この製品が気に入った証である。

オオヤマネコは縄文時代に北海道、本州、おそらく九州の各地に生息していたことが確認されているが、その遺骸を遺跡から検出することは稀である。

犬歯、下顎骨の穿孔例、未加工の上顎骨、下顎第一大臼歯、四肢骨片が出土しているが、10例に満たないであろう。そうした中で本例は骨格の形と、彩色に優美さがあり縄文人の思いを込めた製品ではないかと思う。

オオヤマネコは、更新世に大陸から渡来したものと考えられるが明確ではなく、早期以降は生息していたと思われるが後期以降にはみられない。陸棲の大型獣では最も早く列島から姿を消した。なお、ユーラシア大陸には現在もオオヤマネコは生息している。

骨の形を利用して垂飾品としている例をよく見る。指骨などは良く素材にされている。キツネ、タヌキなどの肢骨の骨端の丸い形を使うのである。

それらと比べるとこのオオヤマネコの尺骨は大型である。しかし、その近位骨端の滑らかな「滑車切痕」を上手に使って垂飾品としている。縄文人ならでは出来ない製品である。ちなみに、尺骨を使う例も他にない。

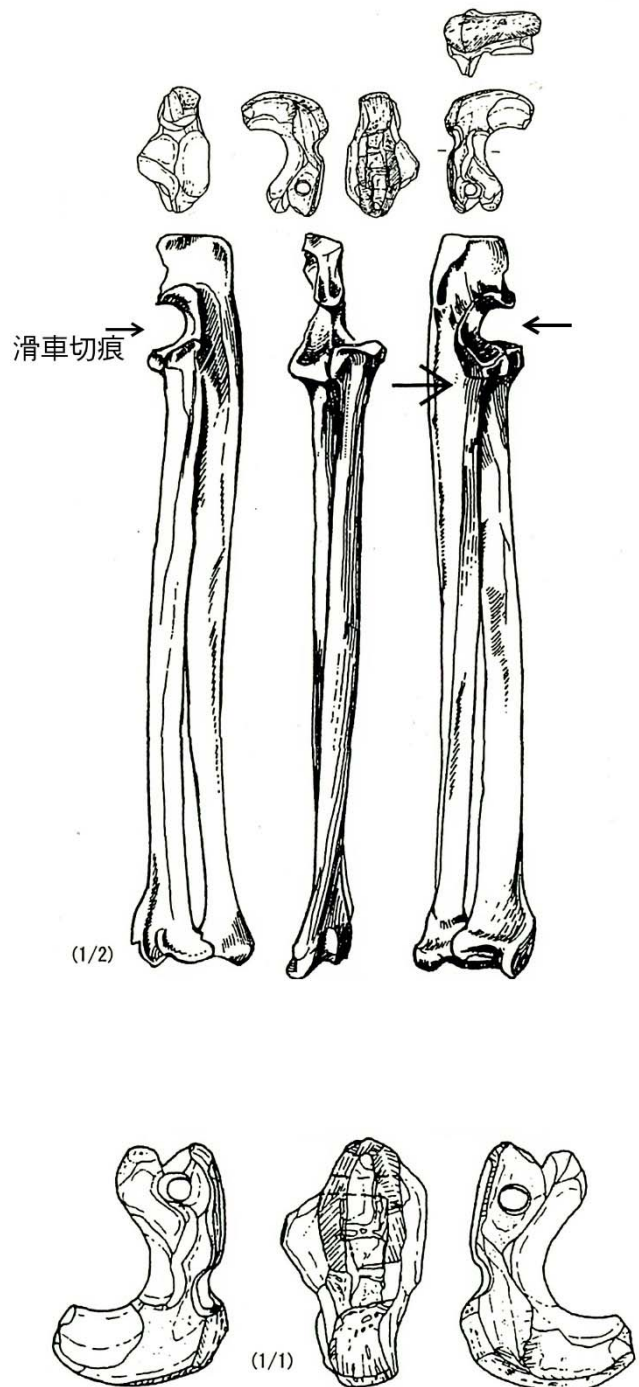


図1 オオヤマネコの左尺骨と東京都西ヶ原貝塚出土尺骨穿孔品（矢印は穿孔の位置）

月刊 考古学ジャーナル No.694, 2017

イノシシの犬歯と骨角器 横浜市称名寺貝塚出土の鈎形製品の複製品

東京湾口でのイルカ漁

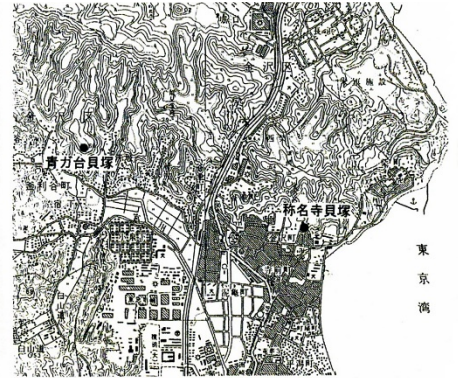
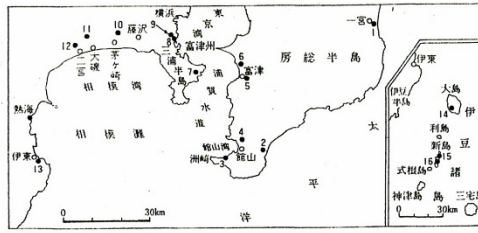
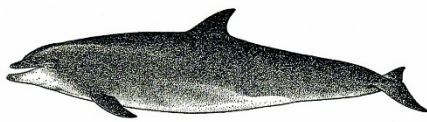


図1 東京湾口、相模灘沿岸、伊豆半島における海外系貝塚とその関連遺跡の分布図 (イルカ類その他海棲獣類遺骸の目立った遺跡あるいは括弧などの出土した遺跡)

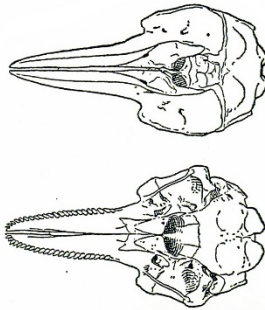
称名寺貝塚と骨ヶ台貝塚の位置 (骨ヶ台 1994より転載、1/25,000)

1. 一宮町一宮貝塚(後期)
2. 町加茂遺跡(前・中期)
3. 鎌山市鉦切岡(後期)
4. 鎌山市臨原貝塚(早期)
5. 富津市富士見台貝塚(後期)
6. 富津市六坪遺跡(前期)
7. 横須賀市吉井貝塚(早期)
8. 横浜市称名寺貝塚(後期)
9. 横浜青が台貝塚(中・後期)
10. 茅ヶ崎市堤貝塚(後期)
11. 平塚市玉籠が台貝塚(中期)
12. 大磯町平遺跡(中期)
13. 伊東市井戸川遺跡(晩期)
14. 東京都庵ノ口遺跡(中期)
15. 東京都波浮根遺跡(晩期)
16. 東京都原遺跡(晩期)

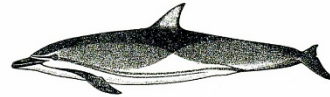


Tursiops gilli
Tursiops gillii DALL, 1873
バンドウイルカ
英名 Gill's Bottle-nosed Dolphin

バンドウイルカ



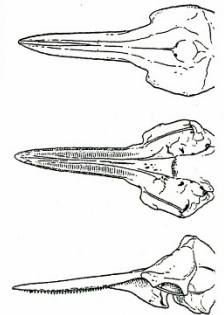
頭骨上面(上)と下面(下)



Delphinus delphis
マイルカ
英名 Common Dolphin

(漢名) スズメイルカ, スズメガタ, スジイルカ

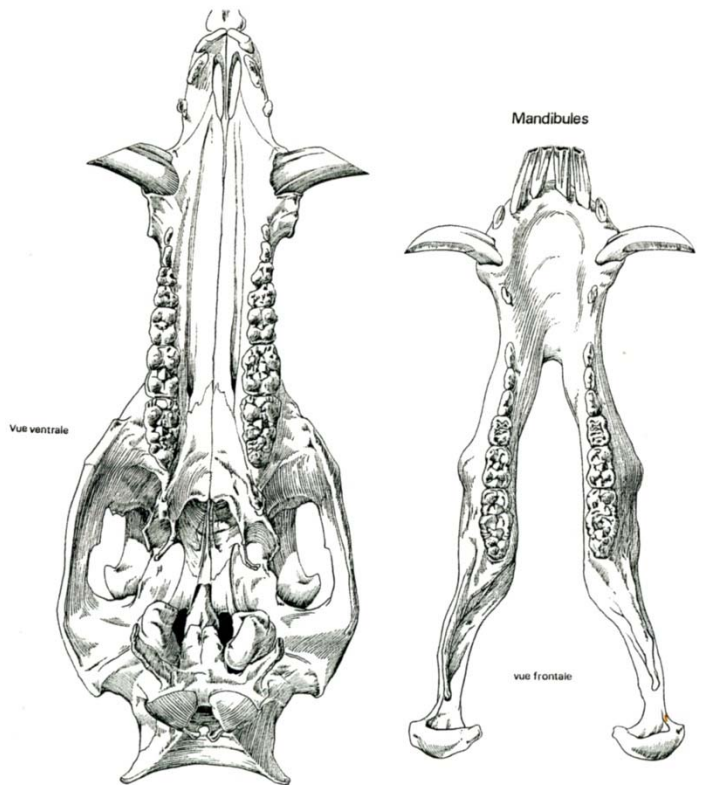
マイルカ



頭骨 (上より上面, 下面, 左側面)

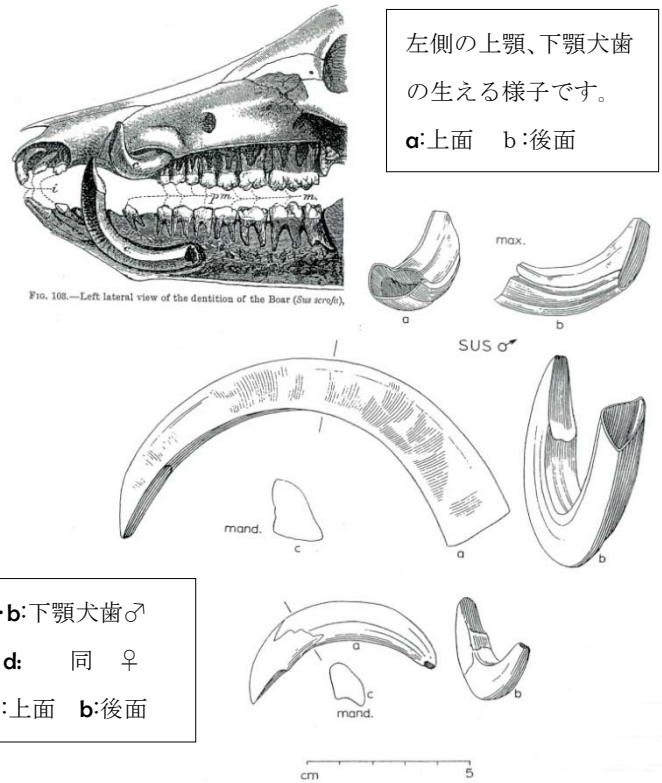
次に、「イノシシ」との骨角器を通じてのつながりです。

称名寺貝塚(横浜市)出土の鈎形製品を例にとりましょう。この貝塚をつくった縄文人が、力を尽くしたイルカの捕獲のために考えた道具の一つです。これには、田村正義氏製作の模型が、縄文人のイルカへの思いを語ります



イノシシの大きな下顎犬歯(雄)

縄文人にはどのように見えたか、この犬歯に様々に手を加え、これを使いあるいは身に付けようとした製品は数多い。その腕曲は美しい。下犬歯全体を使っている穿孔垂飾品(茨城県上高津「後」)もある。近年知られた横浜市称名寺 D3 貝塚の出土品は、全体を縦に半裁しエナメル質面を鉤形の道具としている。注目されるのは薄い歯根部分を鉤先としている。鋭利なのであろう。これにイルカ類の肋骨を半裁した柄を付ける。長い柄がさらに付けられ、飛翔するイルカに引っかけたのであろう。



左側の上顎、下顎犬歯の生える様子です。
a:上面 b:後面

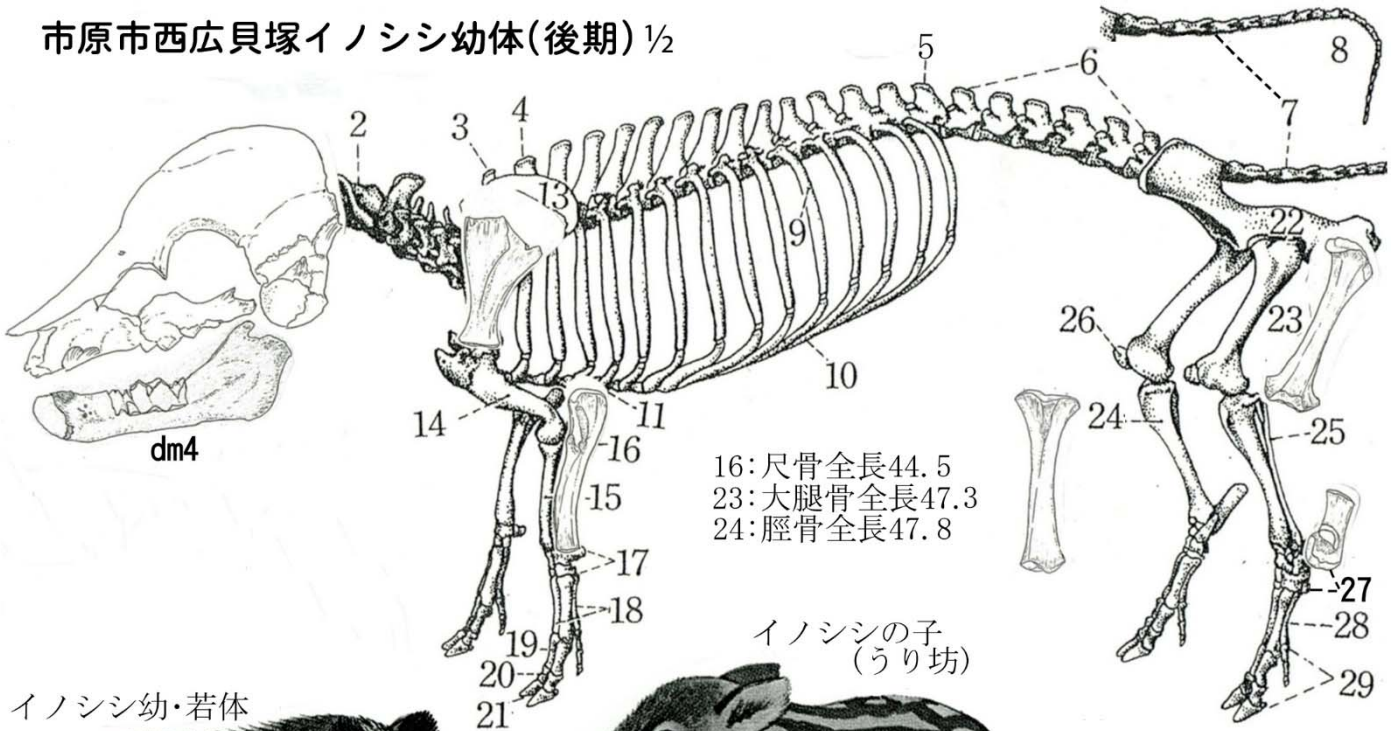
a・b:下顎犬歯♂
c・d: 同 ♀
a:上面 b:後面

厚みのある近心端部分に刻みのあるのは、止めひもをかけるための加工である。
製品の複製模型:田村正義氏作

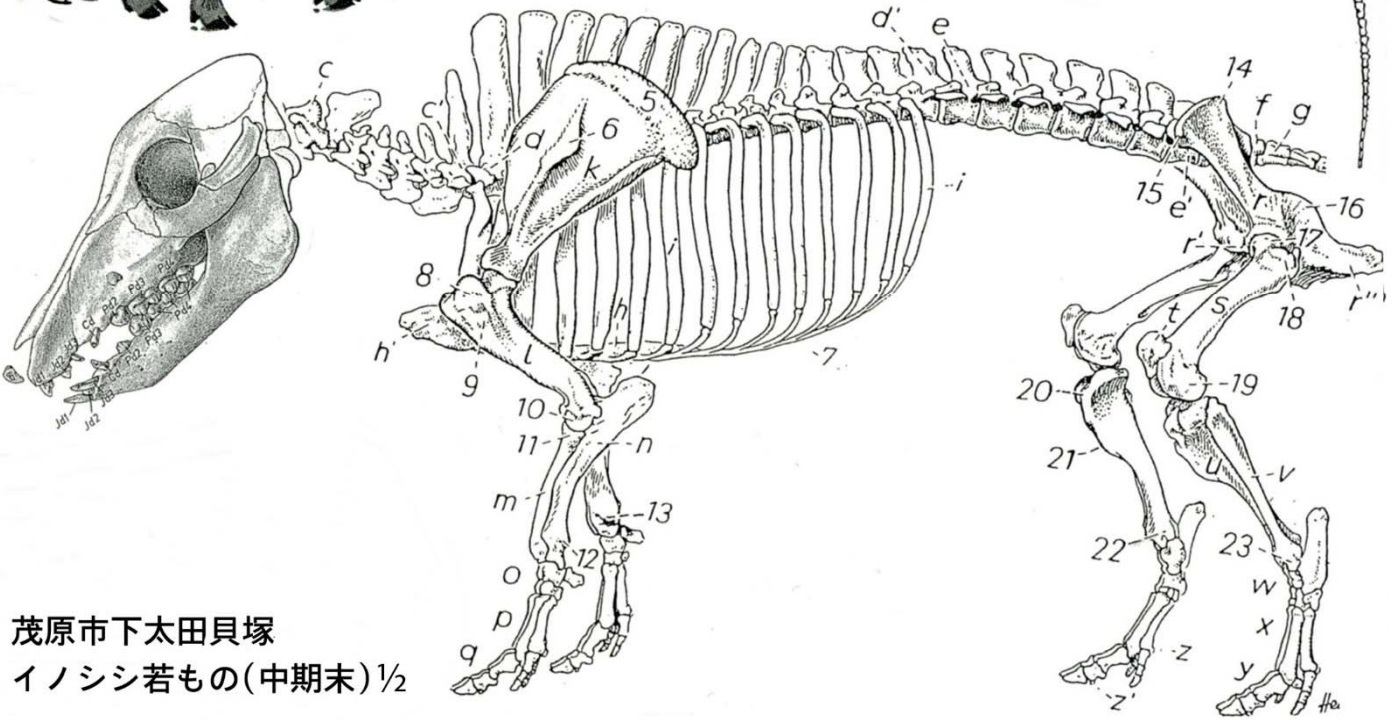


イノシシ幼若体への縄文人の思い

市原市西広貝塚イノシシ幼体(後期) 1/2



イノシシ幼・若体



茂原市下太田貝塚 イノシシ若もの(中期末) 1/2

“縄文人と動物たち”と題して書きましたが、縄文人の活動、動物たちの多様さのことを考えれば、まだまだ書き足りないことばかりです。読者の方から”あれもあるよ”というお言葉をいただければ、返って私としてはうれしい限りです。

骨角器についても同様で、貴重な装身具類、各種の道具の類がまだまだあります。北海道埋蔵文化センターの福井淳一さんのように膨大な資料をまとめられた研究もあり、これについては本州縄文文化における骨角器との比較という視野で述べるつもりでしたが、何とも余裕がありませんでした。その後も貴重なご意見を頂くことができ有り難うございました。

本稿を終えるに当たり、かわいいイノシシの幼体に登場してもらいます。

西広の幼体イノシシは dm4 のほんの僅かな萌出であるが、下顎骨体は dm4 完出に近いサイズであり、四肢骨もそれに近く成育している。つまり、下図に近い体つきになっていた。背中の縞はまだ消えていない。生後 3 ヶ月、母子ははなれていただろう。dm4 が完出することによって上顎骨も発達し、長い鼻面になる。

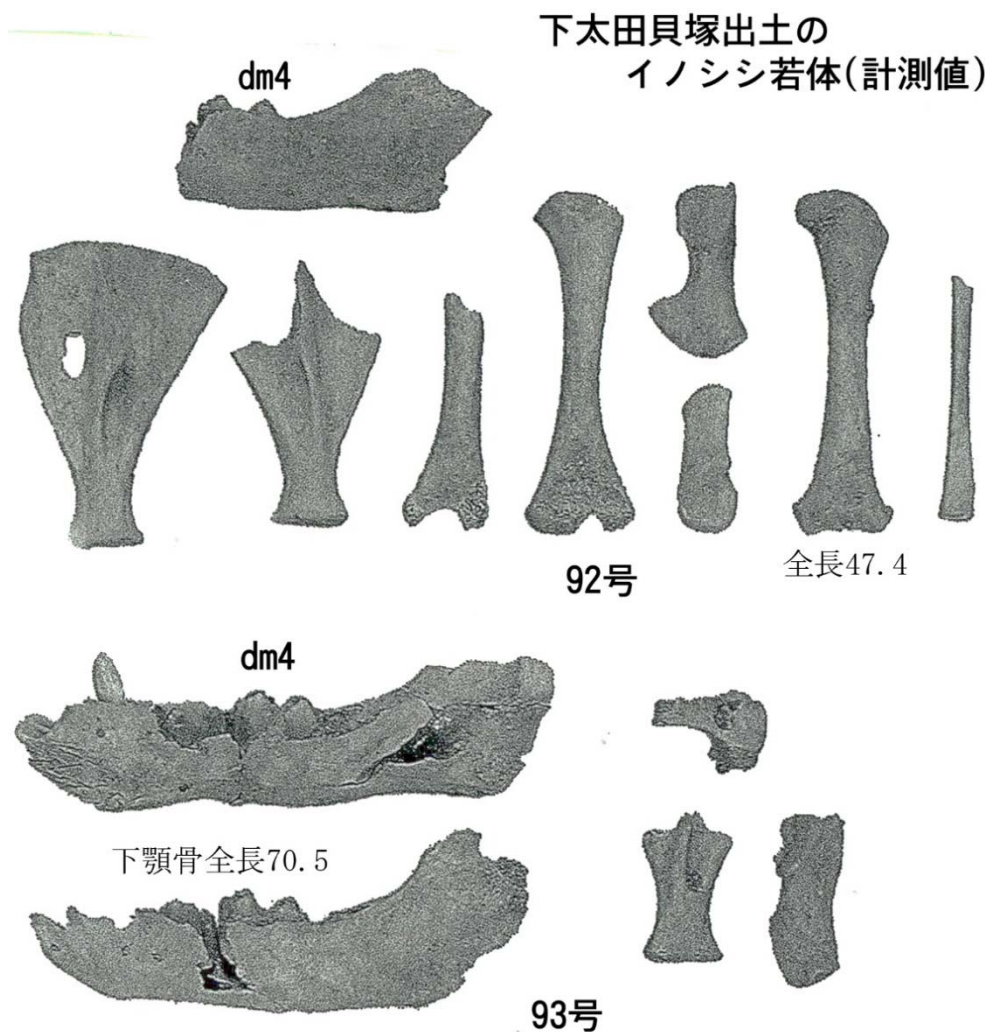
イノシシ幼・若体の骨格図がないので、やむを得ずブタ図 2 種(邦産とドイツ版)に合わせて復元図を作りました。西広貝塚例では、四肢骨も並べてみました。このように並べて見ると、縄文イノシシは大きい事がわかります。

イノシシ、シカを主体とする本州から九州に至る縄文貝塚では、イノシシの幼体、若い個の遺体がしばしば出土します。イノシシの出産個体数の多いことも反映しているのでしょうか。まと

まった出土の場合には、報告書に写真が掲載され、記載されるのですが、部分的な骨になると表中で記載されるのみのこともあります。

本来こうした動物たち(家畜であるイヌの場合を除いて)の遺体は、皮革、骨角、髄に至るまで利用するわけですから、解体しているのですが幼体の中には埋葬されている例、解体後再びまとめられた例、特定の部位のみが集められた例が知られています。

つまり、その動物たちとの関わりは多様であったと云うことが出来ます。その中では、若い個体に対する扱いが注目されます。縄文人との関わりを知る資料になります。縄文人の意思を探ることが出来るかもしれません。



1) 千葉県茂原市下太田貝塚

千葉県太平洋岸域、多数の人骨の埋葬址の出土した遺跡で知られていますが、その中に混じってイノシシの一括した出土がありました。

(西本豊弘他、総南文化財センター、2001)

92号イノシシ

加曽利 EⅢ~Ⅳ式期に帰属する幼児の墓域に隣接して埋葬されていた3体のうち一体である。ほぼ全身が揃っていた。

乳歯の萌出状態は、第4乳臼歯 dm4/4 は歯槽内に留まるか萌出を開始した状態である。生後1~2週間と考えられる。まだ母子の結びつきが強く、母子は無理に離されたのであろう。体の縞はまだ消えていなかったらう。

93号イノシシ

下顎骨写真でみる限り、92号よりもやや大きい、歯の萌出状況は大きくは変わらないようである。

2例とも生後3~4ヶ月で力つきたのではないか。

縄文人にとって肉は最高のごちそうであるが、いつでも手に入るものではない。有り難くいただいた。分け合えば、ほんの僅かな量であったが。そして、その後この若い個体を祭ることを忘れなかった。骨も食べられそうな柔らかさだったが、食べずに一まとめにして埋めた。可愛がったイヌの遺体を葬ると同じように。気仙沼市田柄貝塚の例は、それがいっそう良く分かる埋葬であった。

ただ、こうした例は決して多くない。飼育、飼養を目的としたものではないと思う。偶然に手に入ったのである。だから普段のイノシシに対して持っていた畏敬の気持ちが現れた。成獣であるイノシシの頭蓋骨を畏敬の気持ちで扱った側ヶ谷戸貝塚(浦和市)の例とも共通する、と思う。

2) 千葉縣市原市西広貝塚出土のイノシシ幼体

下太田93号イノシシと同じ生育状態である。特に、頭蓋骨の保存が良好で、うり坊の姿を彷彿させる。骨格のサイズも同じである。生後2ヶ月、母のもとにいた。養ってみたい気持ちがあったが、数週間以上は続かなかった。頭などはこわさず(推定である)、四肢も肉だけ

は外して埋納した。四肢には150g位肉があったかも知れない。

後記・縄文人と動物との関わりは、ただ捕ったり、食べたりするのではなく、動物たちを愛おしむ気持ちもあったのです。イノシシの幼・若体に対する扱い方に見ます。たまたま手に入れた幼体を飼って食べようとするのではなく、何とか育てられないかと考えたが、2~3ヶ月或いは半年がせいぜいでした。遺体は当然食べたのでしょ、後は特別に穴を掘って埋めています。

骨角器が入念につくられていることも、動物への深い関心があったからですが、道具と装身具が相俟って発達していることとも指摘できます。ただ数多くつくり、飾れば良いと云うものではありません。狩猟に大切なイヌの犬歯を垂飾にしている例は非常に少ないのです。余程飼い主だった人と深い関係が生前にあったからと思います。

現代のニューギニアの住民が、変形させたブタの犬歯を飾りにし、何十ものイヌの犬歯を吊り下げた飾りをつくっていますが、どれだけの数のイヌが無体で屠殺されたのでしょうか。その実態すら記されていません。

縄文人の心の中には動物への畏敬の思いが常にあり、ていねいで美しい骨角器の出来たのもその思いがあったからです。骨角器の発達は、自然の美しさを学び、それを伝えたいという気持ちの現れでしょう。

骨角器をつくる基本は、その素材にあります。素材の形態を確認し、それを加工する技術を工夫したのです。それを復元することは、再現し、確認するのです。単なる羅列では、骨角器製作の意図つまり文化を知る事は出来ません。

おわりに

本書の刊行に当たっては、縄文柴犬研究センターの五味靖嘉氏に一方ならぬお世話、ご教示をいただきました。このような機会を与えていただき真に有り難うございました。厚く御礼を申し上げます。

また、いつもながら玉川文化財研究所の方々にお世話になりました。特に、赤間和重様、田村正義様には図版、模型の製作に当たっていただきました。厚く御礼を申し上げます。(2020.04.24)

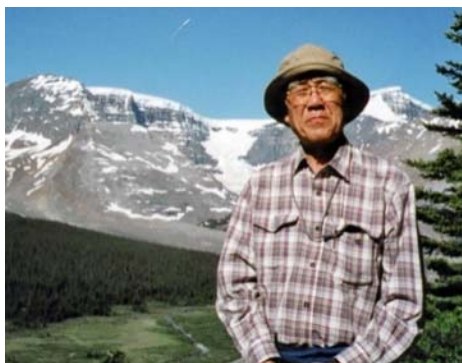
金子浩昌先生の紹介

先生は、1931年生・東京都出身。現在、東京国立博物館・考古課で、日本の各時代の骨角貝製、中国その他の諸地域で採取された品々、約1400点の鑑定をなさっていると伺いました。

本誌に寄せていただいた「縄文人と動物たち」は、先生の人柄のように、温かみのある表題となっております。考古学の文献では、少々短絡的ですが、縄文時代の生業・狩猟・漁撈という文字が並び、更にシカ何%、イノシシが何%・・・骨が出土、何時代である、という内容が主題です。

しかし、ここでは違います。縄文人は、それぞれの動物たちへの、畏敬の気持ちが込められております。

縄文人は、動物の遺体に対する深い思いの現れがあ



ると、先生は考えております。それは、多くの骨角製品や装身具をみて、彼らが如何にして素材を入手し、考え、力を尽くし、工夫し、道具をつくり、それぞれの製品が、生活と

なって遺されてきたからです。その事を最初に考えるようになったのは、会誌に骨角製品を掲載した頃だと伺いました。考古学には、こんな素晴らしい見方があった事に感動です。

金子先生の趣味は、登山や山歩きが大好きで、上高地や穂高に何度か行き、スイスやオーストリア、カナダなど雄大な大氷河に魅せられ見に行きました。また愛犬も長年飼育しておりました。

感謝で一杯です。ありがとうございます。(五味)

著作は全てではありませんが以下の目録を紹介 (筆名、発行年、表題、雑誌名、巻、号、頁)

2011.6 金子浩昌著作目録『金子浩昌著作目録』を刊行する会編。P226。

以下は、イヌやオオカミ関連の主な著作です。

金子浩昌・田中新史・西本豊弘 (1971)：家犬の埋葬骨格、船橋市教育委員会「高根木」, 275。

金子浩昌 (1973)：狩の展開「縄文土器と貝塚」古代史発掘 2, 講談社, 128 - 134。

金子浩昌 (1978)：縄文時代遺跡出土の動物遺存体(2).考古学ノート, 7,18。

金子浩昌 (1982)：古代北方の海洋文化と犬 - 礼文島オホーツク文化遺跡で犬を発掘する。動物と自然, 12(1), 15 - 17。

金子浩昌・大竹憲治・山崎京美 (1983)：犬は良き友だった。アニマ, 121, 6 - 11。

金子浩昌 (1983) 埋葬された家犬。「上総国分寺台発掘調 概報-西広貝塚第4次調査」, 千葉県埋蔵文化財センター, 58 - 59。

金子浩昌 (1984)：「貝塚の獣骨の知識 - 人と動物のかかわり」考古学シリーズ 10 (東京美術)。

金子浩昌 (1985)： a) 土橋遺跡弥生期土壌 (SK80)出土のイヌの遺体. b) 土橋遺跡弥生期土壌(SX1) 出土のイヌの遺骸 について、「土橋遺跡-基礎資料編」袋井市教育委員会, 197 - 200。

金子浩昌 (1987)：縄文人に いくつかしまったイヌ - 遺跡からよみがえる先史犬. アニマ, 172, 28 - 33。

金子浩昌 (1988)：石器時代の遺跡から出土した縄文犬、愛犬の友,誠文堂新光社, 37(6), 338 - 340。

金子浩昌 (1989)：縄文時代の犬.考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。

金子浩昌 (1989)：縄文時代の犬-人とのかかわりの中から,考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。

金子浩昌・田名部雄一・戸川幸夫 (1991)：日本犬と日本人 - 1. 動物たち(日本動物愛護協会), 67, 4 - 9. (対談)。

- 金子浩昌・田名部雄一・戸川幸夫 (1991): 日本犬と日本人 - 2. 動物たち(日本動物愛護協会), 68, 4 - 9. (対談)。
金子浩昌 (1992): 日本考古学における動物遺体研究史-動物とのかかわりにみる日本列島の文化の形成、国立歴史民俗博物館研究報告, 42, 47 - 281。
金子浩昌 (1993): 縄文時代のイヌ - 遺跡にみるイヌとその歴史, 週刊朝日百科「動物たちの地球」, 朝日新聞社, 128, 242 - 243。
金子浩昌(1997): 大田駒込貝塚一号土壙 出土のイヌの遺骸. 大田の文化財, 32, 155 - 163。
(イヌとの関わりとして、茂原信生・江木直子 2002: 「イヌに関する文献集—日本で出版された文献」人類学雑誌より参照)

JSRC 会誌掲載の著作

- 金子浩昌(2006): 「随想 縄文人とイヌ」 - 柴犬 93。
金子浩昌(2008): 「縄文時代のイヌの埋葬」 - 柴犬 100。
金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟①」 - 25。
金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟②」 - 26。
金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟③」 - 27。
金子先生と五味の誌上交流 (2013): 上顎歯牙の摩耗について(1) - 17。(2) - 18。